

風知草

宮本百合子

青空文庫

一

大きな実験用テーブルの上には、大小無数の試験管、ガラス棒のつっこまれたままのビーカア。プラスコ。大きの順に並んだふたつきのガラス容器などがのせられている。何という名か、そして何に使われるものかわからないガラスのくねった長いパイプが上の棚から下っている。透明なカゲを投げあつてているガラスどもの上に、十月下旬の午後の光線がさしていった。武蔵野の雑木林のなかに建てられている研究所は自然の深い静寂にかこまれていて、実験室の中には微かにガスの燃える音がしていた。一隅の凹んだところで、何かの薬物が煮られているのであつた。

ドアに近い実験用テーブルの端に、小さい電気コンロがのつていた。その上に、金網のきればしが置かれ、薄く切つたさつまいもが載せられている。まわりに、茶のみ茶碗、鮭カンの半分以上からになつたの、手製のパンなどが、ひろげられている。

静かな、すみとおつた空氣の中に、いもの焼ける匂いが微かに漂いはじめた。

「そろそろやけて来たらしいね」

「……もうすこしね」

「そつちの、こげやしないか」

「そうかしら」

実験用テーブルの端へもたれのある布張椅子をひきよせて、いものやけるのをのぞいているのは、重吉であつた。親しい友達がもつて来てくれた柄の大きすぎるホームスパンの古服を着て、ひろ子が彼の故郷からリュックに入れて背負つて来た靴をはいて、いものやけるのを見ている。無期懲役で網走にやられていた重吉は、十二年ぶりで、十月十日に解放された。いが栗に刈られた重吉の髪は、まだ殆どのびていない。

ひろ子は、元禄袖の羽織に、茶紬ちゃつむぎのもんぺをはいて、実験用の丸椅子にかけ、コンロの世話をやいていた。

「さあ、もうこれはよくつてよ」

「——あまいねえ。ひろ子もたべて御覧」

「網走においもはあつたこと？」

「あつちは、じやがいもだ。農園刑務所だからね、囚人たちでつくつているんだ」

「あなたなんか和裁工でも、じやがいもぐらいは、たつぱりあがれたの？」

「東京よりはよかつたさ。——巣鴨のおしまい頃はひどかつたなあ……これっぽっちの飯なんだから。二くち三くちで、もう終りさ」

重吉は網走で、独居囚の労役として、和裁工であつた。囚人たちが使つてぼろになつたチヨツキ、足袋たび、作業用手套てぶくろを糸と針とで修繕する仕事であつた。朝の食事が終ると、夕飯が配られる迄、その間に僅かの休みが与えられるだけで、やかましい課程がきめられていた。日曜大祭日は、その労役が免除された。そういう日に、重吉たちは、限られた本をよむことが出来た。そのかわりに、その日は食事の量が減らされた。本のよめる日は必ず空腹でなければならなかつた。労役免除の日は食餉を減らして、囚人たちが休日をたのしみすぎないようにする。それが、監獄法による善導の方法と考えられているのである。焼けたいもをとつて、ひろ子もたべた。

「あら、本当に、このおいもは、特別おいしいわ」

「そ、うだ、う？」

おそい朝飯をすましてすぐ家を出かけ、この研究所に勤めている友達に、重吉の健康診断をしてもらひに來た。重吉とひろ子は、鮭のカンヅメとパンとをもつて來た。友人の吉岡がおいもをあてがつておいて、室を出て行つた。妻子を疎開させたから、研究所に寝泊

りして自炊している吉岡は、自分が実験用の生きものにでもなつているように、隣室のベッドの下に泥だらけのものの大根だのを押しこんで暮しているのであつた。

「吉岡君、なかなかおそいね」

「送別会なんでしよう?——三十分や一時間かかるわ」

白い上つぱりをはおつた助手がドアをノックして入つて來た。片隅で煮えている液体の状態を調べてから出て行つた。その薬液は、きまつた時間をおいて、慎重に観察されながら煮られなければならないものらしかつた。

礼儀正しく助手のひとが入つて來て、自分の任務を果して出てゆくとき、ひろ子は、そのつど、ぼんやりしたはにかみを感じた。実験用テーブルの端におとなしくかたまつて、たのしそうに、言葉すくなくいもの薄ぎれをやいでいる自分たち二人。それは、十月の明るい光線にガラスどもが光つている実験室の薬品くさい内部の光景として何でもないその一部分であるような、さりとて助手のひとが毎日見なれているあたりまえの情景であるとも云えなさそうな、はにかみを感じるのであつた。

いつもがやけてから、ひろ子は、片隅の水道から水をくんで来て、やかんを電気コンロにかけた。一室に、生活にも必要なすべてがそろつている化学実験室のつくりは、ひろ子の

興味をそそった。ひろ子は実験用テーブルをぐるりとまわって、仔細に千差万別の形をし、はり紙をつけられ、一見無難作に、しかも極めて意味のある秩序をもつて整理されている瓶や試験管の林立を眺めた。

重吉は、そうやつて大テーブルのまわりを珍しそうにまわつているひろ子につれて、視線をうつした。そして、ひろ子がひとまわりして、もとの円い木椅子に戻つて来たとき、重吉は、

「二人でいると、ちつとも退屈じやないねえ」

そう云つた。

ひろ子は、重吉の顔を見た。重吉の眼は柔かく、睫毛まつげに美しいかげりがある。ひろ子は、思わずまだ立つたままでいた自分の位置で借り着の重吉の大きい肩に手をおいた。重吉が感じたままを云つた素朴な表現は、今二人でこうしていると何とはなしのたのしさにつれ、彼の十二年の獄中生活はどんなに単調な、変化のない時間の連續であつたかということを、まざまざとひろ子に告げたのであつた。

「でも不思議ねえ、わたしたち一人で暮していなけりやならなかつたとき、退屈だとは思つてなかつたでしよう」

「そりやそうだ」

「わたしなんか寂しい」ということさえよくわからなかつたぐらいだつたわ」
ひろ子の眼の裡を深く眺めて、やがて重吉が何か云おうとしたとき、

「やあ、どうも大変失礼しました」

眉根の太い、小柄な吉岡が戻つて來た。

「ここで養成された看護婦さんの巣立ちだもんだから、どうも手間どつて」
実験用テーブルの上の、つつましいピクニックのあとを見まわした。

「いもはどうでした。案外うまかつたでしよう?」

「あまくて珍しかつたですよ」

「そりやよかつた、あれは我々の農園産ですよ、職員がみんなで作つたんですよ」

戦争が進んで、研究所員の生活不安がつのつて來たとき、研究を継続するためにも吉岡たちが先頭にたつて、広大な敷地のなかに農園をはじめたのであつた。

「——よかつたら拝見しましようか」

「ええ」

重吉は椅子から立ち上つた。そして、すぐその場で背広の上着をぬいでしまつた。

「診察はあつちなんじやないのかしら——」

「ええ。レントゲンがあつちだから……」

「別の部屋へいらつしやるのよ。——どうなさる?」

ひろ子は重吉を見あげた。

「わたしも行きましようか」

「いいよ、いいよ」

気まりわるいような表情で、重吉はことわった。

「大丈夫さ、来なくたって……」

重吉のことわる気分は、ひろ子につたわった。重吉は、自分の病氣について、九年の間、只の一度も信頼出来る診断というものをうけることが出来なかつた。刑務所の医者は、思想犯の患者を診るときには、その前にきまつて附添の看守に向つて念を押した。「どうだ、これは転向しているかね」と。だから重吉は、自分の努力で病勢を納めて來ているものの、本当には拘置所わざらで患うようになつた結核がどの程度のものなのか、正確に知らないも同然であつた。もし余りよくなかつたとき、いきなりその場でひろ子までを切なくさせたくない。ひとりでにその不安から重吉はことわるのだろう。

「じゃ、ここで待っているわ、どうぞ」ゆつくり

小柄な吉岡が、白い診察着の裾をひらひらさせ、スリッパをならして長い廊下を出て行つた。早でまわしに上着をぬいでいた重吉が、いくらか靴を曳き気味に、大きい、ゆつくりした歩調でそのわきを行く。

ひろ子は、研究所の長廊下を段々遠ざかってゆく重吉の後をドアの前に佇んで永いこと見送っていた。

重吉の、あの歩きつき。一步一歩とゆつくり大きく、いくらか体を左右にゆする歩きつき。肩がゆされるのは重吉だけの癖であった。けれども、ああいう足の運びかた、それはすべての独居囚がもつてゐる歩きつきと云えた。日ごろ、足元の軽いひろ子でさえ、編笠をかぶり、編笠の内側に出てゐる編めのジャカ、ジャカに髪の根を気持わるくひきつられながら、女看守につきそわれて歩いたときは、やつぱりああいう工合に、のろく、重く、一步一歩と歩いた。編笠が視線を遮つて、うるさく陰気だからばかりではない。彼等がそういう歩きつきになるのは出来るだけ長く監房の外に出て いる時間をもちたいという、我知らぬ渴望からであつた。きまつた通路を、きまつた場所へ、きまつた目的のために、きまつた時間内にしか歩かせられない。一本の通路の、どつち側を歩くかということさえ歩

く人間の気まかせにはさせられない歩行の間、特に独房にいるものは、自分の一歩、一歩を体じゆうで味い、歩くという珍しい大きい変化を神経の隅々にまで感受しようとする。本人たちが自覚しているよりも深いその欲望から、彼等はみんな外の世界にない独特のろく重い足どりになつて來るのであつた。

あの歩きつきで、細かい紺縫あわせの衿の着物と羽織とをきて、帽子のないいが栗頭に、前年の冬はいていたひろ子の手縫いの草色足袋をはき、外食券食堂で買った飯を新聞紙にぶちまたのをたべたべ、重吉は一人で網走から東京まで帰つて來た。同じ東北本線を、重吉は四ヵ月前、北海道弁の二人の看守の間にはさまれ、手錠をかけられ、青い作業服、地下足袋に、自分のトランクを背負つて北へ向つて行つた。空腹で、看守がくれる煎大豆をたべて、水をのんだための下痢に苦しみながら手錠ははずされずに行つた。十月十四日、二年ぶりに東京の街をひとりで歩くことになつた重吉は、一面の焼原で迷い、ひろ子が住んでいる弟の家のぐるりを二時間も迷つてやつと玄関に辿りついた。その朝、重吉は上野へついて真直に、昔、自分とひろ子とがはじめて一緒に暮した小さな二階家があつた町の方角へと歩いた。二階家は上野から来て坂の上にある国民学校の建物が目じるしであつた。出迎えに会えなかつたその朝、自分のうちへ、ひろ子のいるところへ帰るという重吉の感

情の中心に、くつきり浮んだのが小さい昔の家の入口の情景であつたということを、ひろ子は感動なしに聴けなかつた。

たつた二ヶ月足らずを二人で暮したその家から、十二年の間に一人でひろ子が移つた家は、幾軒あつたろう。移るたびに、ひろ子は細かく周囲の風景も描き、間どりを話し、スケッチの絵ハガキさえ重吉に送つた。それらをみんな重吉はよく知つてゐる筈であつた。勿論、今、ひろ子が住んでいる弟の家も。町名、番地、隣組番号さえ重吉は知つてゐる。その家に両親が暮してゐたとき、重吉も來たことさえある。だが、焼野原となつた東京で、かえつて來た重吉の心に、めじるしとして感じられたのは、昔の二階家であつた。その家は、ひろ子の弟の家の北側が垣根一重のところまで焼けたとき、焼けて跡かた無くなつていた。

自由になつて、まだ十日余りしかたたない重吉のとりなし万端に、ひろ子のこころを動かしてやまないものがあつた。

十四日の朝、二人がやつと口をきけるようになつたとき、重吉はひろ子に、

「どうだらう」

と相談した。

「みんなに一応挨拶した方がいいだろう?」

その一つの家に、焼け出された知人の一家をはじめ三家族が暮していた。その知人と、裏の美術家が、十三日の夜十二時頃まで上野駅の出口の改札に立つて、もしか重吉が来るかと待っていたひろ子の道づれをしてくれたりした。

「それは、その方がいいわ」

「紹介しておくれ」

玄関わきの客室に、知人一家は暮している。ひろ子は、そこへ行つて、「昨晩はありがとうございました」と云つた。

「あんなにしてわざわざ来て頂いたときには来なくて、わたしが待ちくたびれて腰ぬけになつたら、かえつて。——石田です」

うしろに立つていた重吉を紹介した。重吉は、まだ帰つて来た時のままのなりで、嵩かさだかにそこの畳へ手をついて挨拶をした。

「石田です。——どうも永い留守の間はいろいろお世話様になりました」

それは決して、ただ時間の上で永い留守をしていたという挨拶ではなかつた。一度と還

ることはなかつたかもしけなかつた者、生活の外におかれていたものが、今帰つた、良人として妻のところへ、社会生活のごたごたの中へ戻つて來た、その挨拶であつた。戦争の中から、妻のところへ生きてかえることの出来た男たちも、何人か、こういう挨拶のしかたをしたことだろう。わきに膝をついて重吉の挨拶を見ていたひろ子は、のどにせきあげて来て、やつときこえるような声で、

「じゃ、また、のちほど、ね」

重吉を立たせた。二つの手を独房の畳の上へは決してつかなかつた重吉。そのために、例外のようにひどい判決をうけた重吉。その重吉が、急に世間並のしきたりの中に戻つて來て、それをこんなに素直にうけとり、世話になるより、世話にならされているという関係の知人にまで真心をもつて、不器用に挨拶している。人の一生のうちにざらにある瞬間として感じてすぎることはひろ子にとつては不可能であつた。

今、吉岡が、じゃあ拝見しましようか、と云つたとき、重吉はいきなり背広の上着をぬいでしまつた。それも、重吉がただ熱心に診て貰おうと思つていたからのこと。それだけに重吉のいくらかとんちんかんなその動作のこころを解釈するこころもちがしなかつた。

吉岡純介は、重吉というよりは寧ろひろ子の親友の一人であつた。結核専門で、そのた

めにひろ子は何度も重吉の体について相談して來た。一九四二年の夏、東京は六十八年ぶりとかの酷暑であった。前年の十二月九日、真珠湾攻撃の翌朝、そういう戦争に協力することを欲していらない者と見られていた数百人の人々の一人として、ひろ子も捕えられ、珍しい暑い夏を、巣鴨の拘置所で暮した。皮膚の弱いひろ子は、全く通風のない、びつしょり汗にぬれた肌も浴衣もかわくということのない監房の生活で、毛穴一つ一つに、こまかい赤い汗もが出来た。医者は、その汗もに歯みがき粉をつけておけと、云つた。しまいに掌、足のうら、唇のまわりだけのこして、全身がゆで小豆の中におつこちた人形のようになつた。そして、監房の中で昏^{こんとう}倒し、昏睡状態で家へ運ばれた。

二日ほどして意識が恢復しはじめた。最初の短い覚醒の瞬間、ひろ子は奇体な、うれしいものを見た。それは、自分に向つて心から笑つてゐる吉岡の顔であつた。吉岡が、特徴的に太い眉根をうごかして、浅黒い顔に白い歯を見せて笑いかけてゐる。その顔が、丁度アヒルの卵ぐらゐの大きさに見えた。そんなに小さく、そんなに遠いところにあるのに、それは吉岡にまがうかたなく、實に鮮明に、美しく見えた。ひろ子は、うれしさに声をたてて笑つた。拘置所の中で段々足もとがふらつき、耳が苦しく遠くなつて來たとき、ひろ子はどんなに、ここに吉岡さえ來てくれたら、と思つたろう。その吉岡の顔が見えた。ほん

とうにうれしい。——だが——再びくらくなる意識のうす明りの中で、ひろ子は全力をつくして考えた。——これは夢だ。どうせ夢にきまつていて。うれしがつたりしてはいけない。吉岡さんなんかいる筈はないんだもの……。

そこからどの位時間が経ったのか、二度目にまた吉岡の顔が見えた。そのときは、もうあたりまえの大さになつていた。そして、

「どうです、吉岡ですよ。わかりますか」

そういう声もきこえた。眼の水晶体が熱と血液の毒素のためにむくんで、ひどく凸レンズになつていたために、そんなに吉岡の顔も小さく見えたのであつた。

ひろ子は、死んだ自分が又生きられたことを、吉岡の骨折りときりはなして考えることが出来なかつた。重吉はそのいきさつを知つていた。重吉の病気を吉岡に診せたがつてゐるひろ子の気持も度々つたえられていた。

十月十四日に帰つて来たとき、重吉は決して健康人の顔色でなかつた。それでも、昼飯をたべると、すぐ迎えに来ていた友人たちと遠い郊外へ出かけた。そこでは、もう活動が準備されていた。夕方おそくなつて、そして、又道を間違えてひどく迷つて疲れて帰つて来た重吉に、ひろ子は、

「健康診断しましようよ、ね。健康診断をちゃんとしなければ絶対に駄目よ」心痛に眉をよせて力説した。

「吉岡さんに診て貰いましょう。それからでなくちや、わたしたち、どう暮したらいいのか分らないみたいで……わかるでしよう?」

「そうしよう」

それにつけても思いおこすという風で重吉は、

「——木暮の奴……」

と云つた。木暮は、一九四四年頃どこかの刑務所から転任して巣鴨へ来た監獄医であつた。病監での日常事で意見が衝突した重吉について、精神異状者という書類を裁判所へ出した。「わたしはね、こんどこそ、本当にあなたを生かしたいと思つて診てくれる人に診せたいの、いいでしよう?」

十二年の間、重吉は彼を積極的に生かそうとする意志が一つもない環境の中で、猩紅しきうこ熱うねつから腸結核、チフスと患つて、死と抵抗して來た。今度は、どうだろう、と、重吉の無言の格闘を遠まきに見まもられている裡で、死なずに生きて出て來た。吉岡に診ましょうと云われて、いきなり上着をぬいだ重吉が、ひろ子には犇々ひしひしとわかつた。重吉はかえ

つて来てから、自分が感じている善戦し責任を果した満足と歓喜とを、彼におとらない程度まで実感し、慶賀にみたされているいくつかの心があることを日ごとに発見しつつある。それは妻であるひろ子ばかりのことではなかつた。歴史の野蛮な留金がはずされて、くりひろげられた世代の欲求のうちに、重吉の感じる共感が響いているのであつた。あるときには、ひろ子を殆ど涙ぐませるのは、その共感に応える重吉の態度の諄じゅん朴ぱくさと、普通にない世馴れなさであつた。重吉の挙止には、ひそめられている限りない歓喜と初々しさと、万事につき、見当のつかないところがまじりあつていた。それらすべては青年から壯年へと送られた重吉の獄中の十二年が、彼の人間らしい瑞々しさにとつて、どんなに乾いたものであり、胃袋と同じくいつもひもじいものであつたかを知らした。しかも、重吉はそれらについては何とも自分から話さない。十月十日に府中刑務所から解放された重吉の同志たちが、すぐ郊外に集団生活をはじめていた。そこへ重吉につれられて行つて、ひろ子は、昔会つたことのあつた婦人活動家の一人にめぐり会つた。そのひとから獄中で死んだ幾人かの人々の話をきいた。宮城刑務所にいた市川正一が、すつかり歯をわるくしたのに治療をうけられず、麦飯を指でこねつぶして食べていた。そうして生きようと努力していた。が、最後には僅か九貫目の体重になつて死んだ。戸坂潤は、栄養失調から全身疥かいせん癬

に苦しめられて命をおとした。ひろ子は、これらの話をきいたとき泣いた。重吉と自分とに与えられた愉悦に対して謙遜になつた。これらの人々はどんなに生きたかつたであろうか、と。

ひろ子は、実験用テーブルの前の円椅子から立ち上つた。水道のところへ行つて、自分たちの使つた茶のみと、そこに漬けてあつた二つ三つの皿小鉢を洗つた。わきの窓から、建物だけ出来てまだ内部設備がされていない別の一棟が眺められた。その棟の空虚な窓々は、秋の午後に寂しく見えた。

しかし、思えば、感動深く厳肅なこのたびの治安維持法の撤廃と思想犯の解放に付けても、故意か偶然か、ひろ子などには判断のつかない混同が行われていた。今度出獄したすべてのものが治安維持法の尊敬すべき犠牲者、英雄のように新聞やラジオで語り、語られているのであつたが、その中に、元来が積極的な戦争强行論者で、その点が当時として反政府的であつたために拘禁されていたというような人物までがまじっていた。その男が多弁に「民主的」に、権力を非難し野蛮なる法律を攻撃しているのであつた。

話しながら廊下をこちらへ来る吉岡の声がした。重吉が、手さぐりで結んだネクタイを

横つちよに曲げた明るい顔でドアをあけた。

「いかが？」

「案外だつた」

「そんなによくなつていたの？」

「いい塩梅に 病竈びょうそう がどれも小さかつたんですね」

吉岡が煙草に火をつけながら云つた。

「大体みんなかたまつていますよ。この分なら、無理さえしなければ大丈夫と云えますね」「石田に無理さえしなけれど、云うのが抑々そもそも無理らしいわ。——でも、よかつたことねえ。ありがとう」

ひろ子は、椅子の背にかかつっていた上着をとつて重吉にきいた。

「お着にならないの？」

「もう一遍行くんだ——そうでしよう？」

「肺尖のところが、どうもよく見えなかつたんです、丁度鎖骨の下だもんだから。ついでに、見直しておいた方がいいでしよう。血管がそこでいくらか太くなつてゐるから、先の方に全然何もないつて筈はないんですがね」

肺尖のところは、二度目にも骨に遮られてよく映らなかつた。吉岡は、「石田さんは、自分の体についちゃもう専門家なわけだから大丈夫でしょうが、何しろ、ちやんと証人が立つてあるんですからね」

肺尖部の血管のふくれが何を意味し、何を警告しているかを説明した。そして、「まあ三月に一度は必ずしらべられるんですね」と命じた。

二

秋の夕暮のかすかな靄もやが立ちのぼりはじめた雑木林の間の小径ごみちを、重吉とひろ子とは駆まで歩いた。どつからともなく手をつなぎあつて、ゆっくりと歩いた。

「お疲れにならない?」

「そうでもないよ」

「来てよかつたわねえ」

「見当がついたからね」

乗りものの様子がわからなかつたりするからばかりでなく、ひろ子は重吉が帰つてから、出かけるときは大抵一緒に出た。研究所へ来る郊外電車は、時間のせいか思つたよりすいでいて重吉は吊革につかまりながら窓外を駆りすぎる森や畠の景色を飽きずにじっと眺めていた。何の拘束もうけず、どこへでも歩き、そうして田舎の景色の間を進み、ひろ子もついてそこに来ている。このあたりまえさが、自分たちにとつてあたりまえなことになつたという異常なめずらしさ。来る電車の中で、ひろびろとした田野の眺望の間を駆りながら、この感じがつよく重吉の胸に湧いたらしかつた。重吉は、あたりにのり合わせている人々の視線を心づかないように並んで立つていたひろ子の肩に手をおいた。そして低い声で、

「あるくのも、一緒でいいねえ」

と云つた。ひろ子は、微に上気して重吉を見た。重吉は、あたりの乗客たちを全く見ていなかつた。しかし、ひろ子を見ているのもなかつた。視線は窓の外を駆りすぎる外景に吸いよせられている。重吉の手と重吉の声とは、もしかしたら重吉が心づかないうちに、こうして生活はとりかえされた、という抑えがたい感銘を表現したのかもしけなかつた。

夕闇の林間道をあるきながら、重吉は、

「今ごろ、電車、どうだらう」と云つた。

「こみかた?」

「来たとき位ならいいね」

「ひどいと思うわ、時間がよくないんですもの」

その駅にどつさりの乗客が待つてゐるというのではなかつたが、灯をつけて走つて来た電車は満員だつた。

「どうなさる?」

列に立つてゐる重吉の背中を押すようにしながらひろ子があわてて相談した。

「おいや?　あとだと、一時間待つのよ」

重吉は、黙つて一寸躊躇ちゆうちょした。

「のつてしまいましよう、あんまりおそくなるわ」

そう云いながら、ひろ子は自分の体ごと重吉を車内におしこんだ。重吉は、ほかの乗客の足をふむまいとして無理な姿勢で立つて、発車するとき、ひどくよろけた。こむ乗物の中で、粗暴な群集にも乗ものそのものにもまだ馴れない重吉が、大きな体をおとなしく小

づかれたり、押しつけられたりするのを見るのは辛かつた。重吉は、自分が痛感する荒っぽさをひろ子の身にそえて、乗物がこむと、しきりにひろ子をかばつた。今もそれで、二人のあがきが却つてわるかつた。

「ね、わたしはいいのよ、ここでうまく立っているのよ」

池袋で、長い列につながつて省線の切符を買い、乗りかえた。思いがけず、一つ空席があつた。ひろ子は、無理に重吉をかけさせた。

「今は、あなたの方がくたびれやすいのよ」

揉まれた重吉の顔に疲労があらわれている。
「腹がすいて來たね」

重吉は、ひろ子を見上げて苦笑した。

「もう?——でも、おそいこともおそいわね」

「こんどは、夜の弁当ももつて來ようよ」

「そうね」

暫くだまつていたが、やがて重吉が、

「ひろ子」

と呼んだ。

「なあに？」

つり革へ手の先だけをのこして、ひろ子は重吉に顔を近づけた。

「『一塊の土』という小説があつたろう？」

「あるわ」

芥川龍之介の作品としては、自然主義風なものとして人々に記憶されている作品であつた。

「覚えているかい」

「あらましは覚えているつもりだけれど……何故？」

宵のこんだ電車の中で、何故『一塊の土』が思い出されたのだろう。

「あれは、後家の女主人公が、うんと働いて稼ぐけれども、それで自分もはたも不幸になつてゆく話だつたろう？」

「そうだわ」

ちよつと黙つて、重吉は、ごく普通な調子で座席からひろ子を見ながら、

「ひろ子に、なんだか後家のがんばりみたいなところが出来ているんじやないか」

と云つた。

余り思いがけなくて、ひろ子は、眼を見ひらいて重吉を見つめた。

「わたしに?——」

後家のがんばり。……後家のがんばり。……その辛辣さがこたえて、ひろ子の目さきがぼーっと涙でかすんだ。ふるえそうになる声をやつと平らかに、ひろ子は重吉に聞いた。
「あなたに對して、わたしにそういうところがあるとお感じになるの?」

「僕に對してというわけじゃないさ。——一般にね」

「いろんなやりかたで?」

「まあそうだね」

たとえば、きょう自分たちがこうやつて研究所へ出かけ、ひろ子とすれば重吉が帰つて来ているからこそと思うたつぱりした一日をすごした。その間に、自分はどんな後家のがんばりを示したのだろう。愉しそうにしていた重吉が、何のはずみでそれを感じたのだろう。せわしく朝からのことを思いかえして見ても、ひろ子には重吉にそれを云い出させたきつかけを自分からとらえることは出来なかつた。しかも、後家のがんばり、という言葉にふくめられているものは、バカと云われたより、だらしなしと云われるよりひろ子にと

つて苦痛であつた。人生のずれたところへ力瘤を入れて、わきめもふらない女の哀れな憎々しさ。それが、この自分にあるのだろうか。帰つて半月もたたない重吉からこんな電車の中で、それを云われなければならないのだろうか。こらえて、涙があふれた。涙をこぼしながら、ひろ子は、大きいリュックを背負つた男にうしろからぎゅうぎゅう押されていた。

「——どうした?」

つり革にさがつてゐる方の元禄袖で、重吉から半ば顔をかくすようにして黙りこんでしまつたひろ子を重吉は見上げた。

「しょげたのかい?」

ひろ子は合点をした。

「しょげることはないさ」

「……あんなに、貞女と烈婦には決してなるまいと思つて暮して來たのに——」

ひろ子は、このとき重吉のとなりにかけている中年男が自分たち二人の言葉のやりとりに関心をもつてきいてゐるのを知つた。同時に、自分が、涙つぼくしかこの話にふれられない今の感情のひよわさを自覺した。それにしても、どうして、よりによつて重吉は、こ

の混雑の中でこんな話をしはじめたのだろう。ひろ子は、気をとり直し、元禄袖のかげから顔を出して、重吉の耳のそばへ囁いた。

「こは、あんまり話しいい場所じやないわ。そうでしよう？ 降りてから。ね……」

「——そうか」

重吉は、ひろ子の気もちや周囲の状況が、はじめてわかつたという風に、無邪氣におかしそうに笑った。

「でも、どうして急におっしゃるの？」

「どうしてつてことはないが、考えたからさ——どうせほかにすることがないんだからこんなとき話しといた方がいいだらう？」

「大抵の人は、こんなところでは話しうさないとと思うわ」

ひろ子は、小さくほほえんだ。

「それに……いまはあなたもわたしも、おなかがすいているでしょう？ わたしはどうし

ても、これになつてしまふからね」

ひろ子は、指さきで頬つぺたを涙がころがりおちる形をしてみせた。

西へ向つて真直に二本、アスファルト通がとおつてゐる。左右は、おそろしく高い切り

通しの石だたみで、二つの崖をつなぐ鉄の陸橋が、宵空に太く黒く近代都市らしい輪郭を浮き出させている。この高台は、昔東京の海がずっと深く浅草附近まで入りこんでいたそれより昔、武蔵野の突端をなして、海へきつ立つていた古い地層である。

低地にひろがつた尾久方面も、高台も、今は一面の焼け野原となつていた。アスファルトの道ばたには、半分焦げのこつた電柱だの、焼け垂れたままの電線、火熱でとけて又かたまつたアスファルトのひきつれなどがあつた。焼トタンのうずたかい暗い道の上で、通行人は互に近づく黒い影を目じるしにしてよけあつてとおつていた。

「——暗いねえ」

ゆつくりした足どりをなおおそくして、重吉がおどろいたように云つた。

「大丈夫かい？」

「大丈夫よ。暗いけれどこっちの道は案外いいのよ」

「それにしても——こんなところを、ひろ子一人でなんか歩いちゃ駄目だ」

二人で歩ける今、重吉が、一人でなんか歩くなと云つてくれるこの夜道を、ひろ子はこれまで幾度ひとりで通らなければならなかつたろう。リュックを背負い、もんぺにはいた靴をふみしめ、つよく振る手で薄気味わるさを追つぱらうように力んで、通つた。自分の

その姿が、はつきりひろ子の心に浮んだ。その姿を仔細に追つてゆくと、そこには電車の中で重吉が不意に云い出した批評につながる自分の在ることが、ひろ子自身にもさとられるような気がするのであつた。

「さつき電車の中でしかけた話ね、覚えていらつしやる？」

ひろ子が訊いた。

「後家のがんばり、かい？」

二人が話しやめたその位置で、重吉は、はつきりと又その表現をとりあげた。

「わたしには、ね。どうしてああ急におっしゃつたのか、きつかけが見つからないのよ。さつきから考へていてるけれど。……でも、きっとそういうところが出来ていてるんでしうね」

たとえば同じ夜の道を、こうして二人で歩いている。その歩きぶりも心持も、一人で出来るだけ早くといそいで歩いているときと、どんなにちがうことだらう。ひろ子はそれも一つの例として話した。

「自分でどこをどうがんばつているのかわからないところが、つまりくせものね」

「心配しなくてもいいんだ。ただ、これまでひろ子は、云わば一人ぼっちでがんばつて来

たんだから、どうしても、そういうところも出来たのさ。又それだからこそ、もつたとい
うようなところもあるんだし。——しかし、もう条件が変わったんだからね……そ�だらう
?」

「ほんとねえ」

うれしい方へ条件が變つて僅か半月ばかりのこの頃。それにくらべて条件が變るとすれ
ば、より悪くしか変りようのなかつたこれまでの十数年間。

「なんて云つていいか分らないようだわ。一層、一層、あなたの細君であろうとして、そ
のために、そんながんばりが身につくなんて、……」

「ああいう時代だつたんだから無理もないさ。どつちを見ても崩れていて生活の基準がな
くなつた中で、^{いわ}謂ばそれを自分から押しやることで、どうやら自分を真直にもつて來たと
いうところもあるんだから」

話しながら二人がのぼりかかつていた大きい勾配の坂の中程で重吉が立ちどまつた。そ
してひろ子に訊いた。

「この坂は、どの坂だろう」

「——どの坂つて?」

「もとの家へゆくのに、いつも通った坂があつたろう？　あれはどの坂かい？」

「ああ、あれは、この坂よ」

「これっぽつちの狭い坂だつた、あれかい？　ごちやごちや店なんか並んだ……」

「そうなのよ。すっかり変つちやつたでしょ。あの頃はまだずつと急だつたしね」

「そうか！」

さも合点がいつたように、

「それでやつとわかつた」

重吉は又歩き出した。

「帰つて來た日、むこうの角から入つてこの坂まで來たんだよ、多分この見当だと思うのに、坂の様子がまるつきりちがうもんだからそれで又すっかり迷つちやつたんだ」

ひろ子たちが今住んでいる弟の家は、その坂をのぼつて少し行つた焼けのこりの一郭にあつた。十月十四日の朝、網走から上野へついた重吉は、十三年前ひろ子とはじめて持つた家を目當にさがして來て、三時間もその辺をぐるぐる迷つたのであつた。

おそい夕飯をすましてから、重吉は、ひろ子が重吉の家からもらつて來ていたはつたい粉をたべている。もとは客間に使われていた洋風板じきの室に食卓を入れて、食事にもお

客用にも使つて二人は暮しているのであつた。

格別、彼のために新調されたのでもない座布団の上にあぐらをくんで、うまがつて、はつたい粉をたべている重吉を、ひろ子は、飽かず眺める、という字のままのこころもちで見まもつた。

今夜に限らず重吉と一緒に食卓に向つているとき、ひろ子の心にはいつも真新しい感動があつた。こんなに自然な男である重吉。簡単な、いもの煮たのさえ美味おい^いしがつて、友達と一緒に妻と一緒にたべることを愉快がる重吉。自然なままの人間に、こわらしい罪名をつけて、たつた四畳の室へ何しに十二年もの間、押しこんで暮させたのか。そこにどんなよりどころがあつたのか。権力だからそれが出来たというならば、その不条理が不審でたまらないのであつた。

「もういいの？」

「ああ、もういい」

「——さつきの話——あの、がんばりのことだけれど、よく云つて下すつたわね」

重吉は、ちよつと改まつた視線でひろ子を見ていたが、

「でも、さつきひろ子は泣いたんだろう」

いくらか、からかい気味に云つた。

「それは泣いたわ。泣けるのがあたりまえよ。そうじやないの。だから、よく云つて下すつたというのよ。これから、何でもあなたの気がついたことはみんな云つて頂戴ね。これは本当のお願いよ」

手紙ばかりで暮した年月は、それらの手紙がどんなに正直であったにしろ、整理されたものであるにちがいなかつた。その意味では、ひろ子が重吉に示す生活感情も計らぬきれい」ととなつてゐるとも思えた。

「わたしは、何でもよそゆきでなく自分があるとおりにするからね。いやだとお思いになることがあつたら、どんなにべそをかけてもいいから、云つて頂戴。腹の中で、ひろ子といふのはこういうんだな、なんかと思わないでね」

「いつか、そう思つたことがあつたかい？」

「これまでにはなかつたわ。段々いそがしくおなりになるでしょう？　こんな話をゆつくりしていられなくなるのは見えているのよ。ですから、それまでに、痛棒はたつぶりほしいのよ」

「よし。わかつた」

ひろ子は、重吉がかけている深い古い肱かけ椅子の足許に足台をひきよせてその上にかけ、鼠がかじつた米袋の穴をつくろつていた。小切れを当てて上から縫つている手許を見おろしていた重吉が、

「つぎは、裏からあてるもんだよ」

と云つた。いかにも、それだけは確実だ、という云いかたで、ひろ子は思わず笑い出した。
「どうしてそんなこと知つていらつしやるの」

「和裁工だつたんだぜ。ひろ子といえども、裁縫で五円八十銭稼いだことはなかろう」

重吉は、

「僕がやつてやろう、見ていてゞらん、うまいんだから」

袋をとつて、ひつくりかえして、内側からつぎきれを当てて、縫い出した。つかみ針で、左手の拇指と人さし指のはらでおさえた布の方へ針をぶつけてゆくようなぎこちない手つきで、しかし一針一針と縫つてゆく。はじめ笑つて見ていた口元がかすかに震えて来て、ひろ子は深く唇をかんだ。口許を力ませるような表情で、濃い睫毛を伏せ、針を運んでいた重吉のうしろに、ひろ子はまざまざと牢獄の高い小さい窓を見た。そこに鉄格子がはまつていて、雲しか見えず、オホーツク海をわたつて吹く風の音しかきこえない高窓を見た。

その下に体の大きい重吉がはげた赭土色の獄衣を着て、いがぐり頭で、終日そうやつて縫つている。重吉の生きている精神にかけかまいなく、それが規則だからと、朝ごとに彼に向つてぶちこまれるボロ。どんな物音も立たない、機械的な、それだから無限につづいてゆく、惨酷さ。まるで、感傷がなく、ユーモアをもつて縫つている重吉が、最後の糸どめをするのをひろ子は待ちかねた。そして、

「見せて」

手にとりあげて、それを見た。針めがそろつている。ひとつひとつは不器用な針目だが、それは律気にそろつてている。そろつた針目は、ひろ子の目に、重吉が坐らされていた板じきの上の薄ベリの目とも映つた。

「うまいだろう？」

「うますぎるわ、でもね、わたしはもう一生あなたには針はもつて頂きたくないわ」

ひろ子は立つて行つて 砥箱すずりばこをもつて來た。

「これはこうしておくの」

その日の日づけをかいて、和裁工石田重吉記念作品と、つききれの上に書きつけた。

さきへ二階へあがつて、ゆっくり床をのべながらひろ子は、朝からのこと思いかえし

た。すべてのことが、重吉に云われた後家のがんばりを中心にもういめぐらされるのであつたが、並んだ二つの畳を丁寧にこしらえて行くうちに、ひろ子の心に、次第に深まる駭きがあつた。ひろ子にとつて、ずばりと後家のがんばりを警告してくれるのが、良人である重吉よりほかにない実際だとすれば、本当に後家になつた日本の数百万の妻たちには、誰が親身にそのことを云つてくれるのだろう。一生懸命に暮せばこそ身につきもするそういう女のがんばりについてその一途さにねうちがあるからこそ、一方のひずみとして現れるがんばりは、もつとひろやかで聴くより柔軟なものに高められなければならないのだと、誰が、良人のいない、暮しのきつい後家たちに向つて云つてくれるのだろう。そして、がんばらずに生きられる条件を見出してくれるのだろう。それを思うと、自分をこめて、ひろ子の眼にじむ涙があつた。

床の上に立つて着換えをする重吉に、寝間着の紐をわたしながら、ひろ子は、愛称のようゆつくりと、

「石田さん」

重吉の姓をよんだ。

「わたしは、あなたから後家のがんばりを云われるのだと思うと、本当の後家さんにすま

ないよう思ふわ。知つていらつしやる？ つやちやんだつて後家さんなのよ」

重吉の弟の直次は、広島で戦死したのであつた。

三

遠い郊外へ出勤する重吉の外出が、段々規則的になり、来客が益々ふえ、隠されていた歴史の水底から一つの動きが、渦巻きながらその秋の日本の社会の表面に上昇しはじめて来た。十月十日に解放された徳田・志賀の名で発表されたパンフレット型の「赤旗」は重吉がかえつて間もなく出版され、広い範囲での話題となつていた。其を読むほどの人々は、様々な期待、要求、満足、不満足に、おのずからこの十数年間濃くされて來た個人個人の氣質や生きこしかたの色と匂いを絡み合わせて、其について語つていた。忙しくなつてゆく迅さは、重吉が市中の混雜や、つづけんどんな乗物けげんの出入りに馴れるよりも急速であつた。永年長い道を歩いたことのなかつた重吉は、怪訝けげんそうに、

「変だねえ、どうしてこんなところが痛いんだろう」

靴下をぬいで、ずきずき疼うずく踵をおさえた。

「やっぱり疲れるんだろうか」

「そうですとも！ あれだけの間に、わたしたちが会つて話の出来た時間が、一体どの位あつたとお思いになる？ たつた百八九十時間ぐらいよ、まる八日ないのよ。ですもの：：およそわかるわ、一日にどんなに少しづか歩かなかつたか……」

前の晩、おそらくまでお客様があつて、その朝、ひろ子は、起きぬけからすこしあわてた。重吉は、入念に新聞をよみ、紙を出して何かノートを書きつけ、その間には荒れている庭を眺めて、

「あの樽、何か埋めていたのかい」

掘りだしたまま、まだ楓の樹の下にころがされている空樽に目をとめたりした。西日のさす側の枝から見事に紅葉しかけている楓が秋の朝風にすがすがしかつた。

弁当を包んでいると、置時計を見た重吉が、俄に、

「ひろ子、あの時計あつていいかい」と云つた。

「あつていると思うわ」

「ラジオかけて御覧」

丁度中間で、いくらダイアルをまわしても聴えて来る音楽もなかつた。重吉は、いそいで紙片をまとめて身支度にとりかかつた。ひろ子は、急にとりいそいだ気になつて、「一寸待つて。わたし、まだなんだから」

もう一つ自分の弁当をつめた。その日は、ひろ子も同じ方角に出かけなければならぬのであつた。一緒に出かけようとばかりせき立つて、ひろ子が食卓のまわりでのぼせていると、重吉が、

「ひろ子、ここが駄目だよ」

ぶらぶらしてはまらないカフス・ボタンの袖口をつき出した。洋服を着はじめてから日のたたない重吉には、あちこちで止めたり、しめたりするボタンやネクタイが苦手で、支度にはいつも閉口した。シャツのカフスがどう間違えて縫つたものか特別せまくて普通にボタンをとめてからでは手をとおしくかつた。

ひろ子は、友人の贈物である綺麗な細工のボタンを、粗末なシャツのカフスにとめた。うしろの衿ボタンも妙になつてカラ一がさか立つてゐる。重吉は自分のまわりを動くひろ子の頭越しに時計を見ながら、いかにも当惑したように、

「時間がないな」

と云つた。

「九時半までに必ず行かなけりやならなかつたんだ」

「まあ！ あすこまで二時間かかるでしよう。困つたわ。それなら、はつきり云つておいて下さればよかつたのに。——いつも通りかと思つた」

なおあわててひろ子は、半分ふざけ、半分は本氣で重吉の大きい体をつかまえ、少し荒っぽく、

「——こつちを向いて」

カラーリをつけ、

「こんどはこつち」

これを前でとめネクタイをしめさせた。

「自分でカフス・ボタンもつけられないなんて、わるい御亭主の見本なのよ」

重吉は迷惑げに、あちこちまわされて、支度が終ると、すぐ出て行つた。上りぐちで、「おいてきぼりになつちやつた！」

そう云いながらひろ子が、重吉の帰る時間を見ていた。

「何時ごろ？ いつも頃？」

これも貴いもののハンティングのつばを、一寸ひき下げるようにして、重吉は無言のまま大股に竹垣の角をまわって見えなくなつて行つた。ひろ子は、暫くそこに佇んだまま、むかごの葉がゆれている竹垣の角を眺めていた。重吉は、口をきかずに出て行つた。意識した手荒さでまわした重吉の体の厚みが、手のひらに不自然に印象されて、それはひろ子のこころもちをかげらせた。

自分の用事がすんで、ひろ子が帰つたのは五時すぎであつた。御飯をたくことと、おつゆのだしをとつておくことだけをいつも頼む合い世帯のおとよに、

「ただいま。——石田、かえりました?」

ききながら、ひろ子は上り口に入つた。

「まだですよ」

「そう。——」

「だしは七輪にかけてありますから……どなたかお客様までです」

がらんとした室に、ひろ子のまたいとこ又従弟に当る青年がひとりで坐つていた。樺太の製紙会社につとめている父親や、引上げて来た母親、子供たちの様子をきいたりして夕飯のしたくが終つたとき、敷石の上を来る重吉の靴音がきこえた。

ひろ子は、上り口へかけて出て行つた。

「おかえりなさい」

重吉は黙つて、踵と踵をこすり合わせるようなやりかたで鞄をぬぎすてて上り、ハンテイングを、そこの帽子かけにかけた。いつもの重吉は、書類入の鞄から帽子から、ひどくくたびれたときには、その場で窮屈な上着までひろ子の腕へぬぎかけるのであつた。

「けさはよつぽどおくれて？」

「一時間ばかりおくれた」

青年のいる室へ入つて、重吉は、簡単に挨拶すると、そこに来ている雑誌の封を開けて目をとおしはじめた。

「お着かえにならないの」

「…………」

重吉は、洋服のまま、どうしたのか、ひるの弁当があまつていたのを鞄から出して、先ずそれをたべはじめた。

「どうして？——」つち上ればいいのに

「いいんだ」

つとめて、ひろ子は若い又従弟と口をきいて食事をすませた。重吉は、すぐ、

「あがるよ」

鞄をもつて、二階へ登つて行つた。とりのこされたひろ子は体じゅうがよじれるように苦しくなつた。

行つてみると、重吉はぬいだシャツや服を机の上につみ上げて、そのよこのところに本をのせて見ていた。ひろ子は、みんなどけてそれを衣紋竿えもんざおにつるした。

「——ね、どうなすつたの？」

「どうもしない」

「いいえ。こんなのがあたりまえじやないわ……いつものようじやないわ。ね、どうして？」

重吉は椅子の上で顔を横に向け、ひろ子を見ないようにしている姿勢のまま、「どうもしない。きょうから、何でもみんな自分ですることにきめたんだ」と云つた。

「…………」

「すっかり、考え方なく、してくれるとおりして貰つていたんだが。俺も甘えていたんだ。——わるい亭主の見本だと思われているとは思わなかつた」

冗談よりほかの意味はありようもなく云つた言葉が、重吉をそんなに傷けたことが、ひろ子をおそれさせた。

「御免なさい。わたしふざけて云つたのに——」

「——しかし、ひろ子はしんではおそらくそう感じているところがあつたんだ。……世間には良人のことは何でもよろこんでする細君もあるんだろうが。——自分のことを自分でするのはあたり前なんだから、もうすっかり自分でする——監獄じやそうしてやつて來たんだ」

ひろ子は、思わず重吉の両肩をつかまえた。

「変よ、監獄じや、なんて！ それは変よ！」

涙をあふらしながら、ひろ子は恐怖をもつて感じた。どういう複雑な動機からか、ともかく重吉は、ひろ子が想像出来るよりも遙かに深い幻滅のようなものを、二人の生活について感じたのだ、ということを。ひろ子は絶望感からそのまま立つていられなくなつた。前の畳へ崩れこんで重吉の膝の上に頭を落した。

「考えて頂戴。あなたのことあなたがなさい、というような心持で、どうして十何年が、やつて来られたのよ」

ひろ子がそんな石のような女で、身のまわりのことも今後一切手をかりまいと思ひきめたなら、その重吉にとつて、ひろ子の示す愛着は、どんな眞実の意味があり得よう。二人の自然な愛情はなくて、重吉が決して惑溺わくできすることのない女の寧ろ主我刻薄な甘えと、ひろ子がそれについて自卑ばかりを感じるような欲情があるというのだろうか。

「あんまり平凡すぎる！」

ひろ子は、激しく泣きだしながら頭をふつた。

「わたしは、いや！ こんなの、いや！ あんまり平凡だ」

それにしても、ひろ子には分らなかつた。重吉が、こんなに永年の間、互に暮して來たあげく、突然、云つてみれば、今瞼から鱗うろこが落ちた、という風にそれほど深い幻滅を発見したというのは、どういう理由があるのだろう。重吉もひろ子も、劣らず自然なままの生れつきであつたから、一方で離反して、一方で繋がれてゆくというようなゆがんだ人工の夫婦暮しは出来なかつた。眞実重吉の幻滅がとりかえせないものならば、それはひろ子にとっても、これから的生活は成り立たないということなのであつた。

ひろ子は泣きながら、泣いている自分の頭が重吉の膝の上にあること、重吉はそうして泣くひろ子を、自分から離そうとしていないことを、とりすがる一本の綱のように鋭く感

じた。ひろ子のこの苦痛の深さに、一心に暮した十二年の歳月が折りたたまつて投影しているとおり、重吉の索漠たる思いにも、同じ長い年月に亘つて生活して来た彼のひどい環境の照りかえしが決してないと、どうして云えよう。

閃く稻妻のようにひろ子の心を一つの思い当りが走つた。それが、泣き膨れたひろ子の精神の渾沌こんとんを一条の光となつて射とおした。ひろ子は、重吉の手をとつて、「ね、云つてもいい?」ときいた。

「いいさ」

「わたしが、あなたの気もちを傷けたのは本当にわるかつたわ。どうか許して頂戴。――

そしてね、あなたは、あんなに永い間牢屋に暮していらしたでしよう? あすこには、決して、あなたに対する絶対の支持というものは存在しなかつたのよ。いつだつて、二重の、いつでも逃げ腰の親切が、さもなければはぐらかしかなかつたのよ。そうでしよう?」
「…………」

「絶対の支持、ということがわかる? その幅の中で、どんなに憎まれ口をきいたにしても、馬鹿をしたにしても、それでも、なお絶対の支持であるという、そういう絶対の支持

がわかる?」

ひろ子は泣き泣き云つた。

「ひろ子の支持は、そういう絶対の支持だということがわかる?」

永い間沈黙していた後、重吉は、はじめて顔を向けて、正面からひろ子を見た。ああ、やつと重吉にとつてひろ子は再び見るに耐えるものになつた。ひろ子は、両手の間に顔を挟んだ。

「ね、わかる?」

「——絶対の支持なら、どうしてあんなことを云うのかい」

「わるい御亭主の見本?」

「そうさ」

「あら、だつて母親だつて自分の可愛い児に云うわ、わるい児の見本ですよ、ぐらい……」

「そういう調子じやなかつた」

ひろ子は、じつと重吉の顔をみつめた。苦しく、重く閉されていた重吉の表情はほぐれはじめて、二つの眼の裡にはいつもの重吉の精気のこもつた艶が甦つている。ひろ子は、うれしさで、とんぼがえりを打ちたいようだつた。

「生きかえつて来た、生きかえつて来た」

ひろ子は、小さい声で早口に囁いた。

「なにが？」

「——わたしたちが……」

重吉は、やっとわかつたがまだ怪訝だという風に、

「しかし、ひろ子の調子に、そんなユーモラスなところはなかつたぜ」と云つた。

「そうだつたこと?」——

ひろ子は、恐縮しながら、いたずらっぽく承認した。

「そこが、つまりあなたのおつしやるがんばりの情けなさなのね、きっと。——でも、もうすこしの御辛棒よ、じき無くなつてよ」

重吉を励しでもするように云つた。

「あなたただつて相当強襲なんですもの」

こわい、絶壁をやつと通過したときのように、ひろ子は体じゅう軟かに力ぬけがした。

ひろ子は、重吉の膝を撫でた。

「一日じゅう、あんないやな氣持で仕事していらしたの、わるかつたわねえ」

「そうでもないさ」

率直に重吉は云つた。

「家の近くへ来るにつれて、だんだんいやな氣持になつたんだ」

「そりやそうね、ああ思えば、もう本質的に家なんてどこにもないんですもの」

うちがない、ということは、ひろ子にどつさりのことを思わせた。十月十日に解放された重吉の同志たちの主だつた人々は、殆どみんな妻をもたず、従つてうちをもつていなかつた。うちも妻も、闘争の永い過程にいろいろな形でこわされ、とられた。人間らしさを極限まではぎとられた。その痛苦から屈従させようと試みられた。ひろ子にしろ、つかまる度に、女の看守長にまで云われることは、重吉の妻になつてゐるな、ということだった。一層軟かく重吉の膝に頭を埋めながら、ひろ子は、

「げんまん」

重吉に向つて小指をさし出した。

「二度ともう憎らしいことは云わないから、あなたも約束して。さつきのようなことは云いつこなし」

自分たちの生活を毒し、あわよくば其をこわす力は、決して無くなつていない。ひろ子は身をひきしめてそのことを思つた。正面から攻撃しなくなつたとき、それは、嘗て打撃を加えたその痕跡から、そのひずみから、なお襲いかかつて来る。ひろ子は、頬をもたせている重吉の左の膝の上の方を考え沈みながら撫でた。そこに、着物の上からもかすかにわかる肉の凹み(へこみ)があつた。大腿のところに、木刀か竹刀かで、内出血して、筋肉の組織がこわされるまでなぐ擲り叩いて重吉を拷問した丁度その幅に肉が凹んでいて、今も決して癒らすのこつているのであつた。

四

腰かける高いテーブルで、重吉が書きものをしていた。その下に低い机をすえて、ひろ子が、その清書をやつていた。

「何だか足のさきがつめたいな」

重吉が、日ざしは暖かいのに、という風に南の縁側の日向を眺めながら云つた。十一月に入ったばかりの穏やかな昼すぎであつた。

「ほんとなら今頃菊の花がきれいなのにね」

毛布を重吉の足にかけながらひろ子が云つた。

「この辺は花やもすつかり焼けちまつたのよ」

焼跡にかこまれたその界隈かいわいは、初冬のしづけさも明るさも例年とはちがつたひろさで感じられた。夜になると、田端の汽車の汽笛が、つい間近にきこえて来た。

「久しぶりで、たっぷり炭をおこしてあげたいけれど、あんまりのぞみがないわ」

「いいさ。寒けりやいくらでも着られるだけ結構なもんだ」

ペンをもつたなり口を利用していた重吉は、又つづきを書きはじめた。長い年月、ほんとうに温く、人間らしくあついものを食べることもなく暮して来た重吉は、今のところ、何でもあつくして、それからたべるのが気に入つた。揚げたての精進あげまで、

「やくと、なおうまいね」

電熱のコンロに焙あぶつてたべた。

「あつくしようよ」

おつゆでも、お茶でも、生活の愉しさは湯気とともに、というように、あつくするのであつた。ひろ子には、そういう重吉の特別な嗜好が実感された。さつき、コンロに湯わか

しをかけたとき、

「たしかに俺はこの頃茶がすきになつたね」

重吉が、自分を珍しがるように云つた。

「もとは、ちつとも美味いなんと思わなかつたが……」

「この頃はみんなそうなのよ。ほかに何にもないんですもの。お茶の出しがらの葉っぱ、ね。あれを、はじめの時分は馬の餌に集めていたけれど、あとでは人間もたべる、と云つたわ」

「僕はなかでくつたよ、腹がすいてすいてたまらないんだ」

暫く仕事をしつづけて、ひろ子によみとれない箇所が出て來た。

「これ、何処へつづくのかしら」

下から消しの多い草稿をさし上げて見せた。

「ポツダム宣言の趣旨に立脚して……その次」
行を目で追つて、

「ここだ」

重吉は、もつているペンで大きいバツテンをつけて見せた。

「今後、最も嚴重に——」

「そこまでとぶの？」
八艘はつそうとびね」

二人は又無言になつた。写し役のひろ子の方に段々ゆとりが出来て來た。晩の支度に階下へおりたり、お茶をいれたりしながら、仕事をつづけ、重吉は、わきでひろ子がそういう風に時々立つたりすることがまるで気にならないらしく、ゆつたりとかまえ、しかも集注して、消したり書いたり根よく働いている。

頬杖をついて、ひろ子はその雰囲気にとけこんだ。こんなに楽な、しかもしつとり重く実つた穀物の穂をゆするようにたっぷり充実した仕事のこころもちを、経験したことがあつたろうか。襖のあいている奥の三畳へ視線をやつて、ひろ子は暫く凝じつとそつちを眺めていた。北側の三畳の障子に明るく午後の日ざしがたまつていて、その壁よりに、一台の折りたたみ寝台が片づけてあつた。三つに折りたたまれて錯綜して見える寝台の鉄の横金やところどころ鎧びたニッケル色のスプリングがひろ子のいるところからよく見える。重吉がいた網走へ行こうとしてこの家を出てゆくとき、ひろ子はその寝台を折りたたんでその隅に片づけた。それなりそこで、きょうまでうつすり埃をかぶつている。重吉がそれを見つけて、

「便利なものがあるじゃないか。一寸休むとき使おうよ」

そういつたときも、ひろ子は、すぐそれをもち出す気になれなかつた。

この一人用の寝台の金具を見るとき、ひろ子がきまつて思い出す一つの情景がある。それは東に一間のれんじ窓があつて、西へよつた南は廊下なしの手摺りつきになつた浅い六畳の二階座敷である。れんじ窓よりにこの寝台が置かれて、上に水色格子のタオルのかけものがひろげてあり、薄べつたい枕がのせられてある。入つたばかりの右側は大きい書物机で、その机と寝台との間には、僅か二畳ばかりの畳の空きがある。その茶色の古畳の上にも、ベッドの上にも机の上にも、竹すだれで遮りきれない午後の西日が夕方まで暑気に燃えていた。その座敷は、目には見えないほこりが焦げる匂いがしていた。救いようなく空気は乾燥していた。そして、西日は実に眩しかつた。

それは、ひろ子が四年間暮した目白の家の二階であつた。二階はその一室しかなくて、ひろ子は、片手にタオルを握つたなり、乾いた空氣に喘ぐような思いで仕事をした。

その座敷のそとに物干がついていた。物干に、かなり大きい風知草の鉢が置かれてある。それは一九四一年の真夏のことであつた。その年の一月から、ひろ子の文筆上の仕事は封鎖されて、生活は苦しかつた。巣鴨にいた重吉は、ひろ子が一人で無理な生活の形を保と

うと焦慮していることに賛成していなかつた。弟の行雄の一家と一緒に暮すがよいという考えであつた。けれども、ひろ子は、抵抗する心もちなしにそういう生活に移れなかつた。二十年も別に暮して來た旧い家へ、今そこに住んでいる人々の心もちからみれば、必要からよりも我から求めた苦労をしていると思われていてる条件のひろ子が、収入がなくなつて戻つてゆく。それは耐えがたかつた。姉さん来ればいいのにと行雄も云つてゐるのに行かないのは、体裁をかまつてゐるひろ子の俗っぽさだ。そう重吉の手紙にかかれていた。

三年前にも一年と数カ月、書くものの発表が禁止された。しかしそのときは、ひろ子一人ではなかつた。近い友人たち何人かが同じ事情におかれた。その頃は、まだ文学者一般に、そういう処置に對して憤る感情が生きていて、ひろ子の苦しさも一人ぎりのものではなかつた。それについて話す対手があつたのであつた。

三年たつた四一年には、ぐるりの有様が一変していた。作品の発表を「禁止されるような作家」と、そうでない作家との間には、治安維持法という鉄条網のはられた、うちこえがたい空虚地帯が出来ていた。更に、一方には中国、満州と前線を活躍する作家たちの気分と経済のインフレーション活況があつて、ひろ子の立場は、まるで孤独な河岸の石垣が、自分を洗つて流れ走つてゆく膨んだ水の圧力に堪えているような状態だつた。

経済上苦しいばかりか、心が息づめられた。その窒息しかかっている思いを、重吉に告げたところで、どうなろう。重吉に面会する数分の間、本当にその間だけひろ子は晴れやかになつて笑えた。重吉も晴々して喋るひろ子を見て、愉快になつた。だが巣鴨を出ると、よつてゆけるような友達の家は遠すぎたりして、行雄のところへ行き、自分の内面とかかわりようもない声と動きにみちた暮しの様を見ると、ひろ子は、せめてまだあの家がるうちに、という風に気をせいて目白へ帰るのであつた。

それにしても、何と二階の座敷は暑くて、乾きあがつていただろう！ 仕事の封じられた大きい机は、何と嵩ばつて、艶がなくなつていただろう。

或る晩、ひろ子は、心のもつてゆき場がなくなつて、駅前の通りへふらりと出て行つた。よしそう張りの植木屋があつて、歩道に風知草の鉢が並んでいた。たっぷり水をうたれ、露のたまつた細葉を青々と電燈下にしげらせている風知草の鉢は、異常にひろ子をよろこばせた。どうしてもそれが欲しくなつた。ひろ子は、亢奮した氣持でその鉢を買い、夜おそく店をしまつてから運んで来て貰つて、物干においていた。

洗濯物をどつさり干しつらねるというような落付いた日暮しを失つていたひろ子は、がらんとした物干に置かれた、その風知草に、数日の間、熱心に水をやつた。けれども、益

々苦しさが激しく、しづ心が失われてゆくにつれ、哀れな風知草までが苦しい夏の乾きあがつた生活にまきこまれて行つた。風知草はいつの間にか、枯れ葉を見せはじめた。ひろ子は、けわしい眼づかいでそれを見ていた。が、水はもうやらなかつた。

あの夏、たとえば、どんなに一人暮しの食事をして暮していたのか、今になつてひろ子には思い出せもしなかつた。思い出すのは、却つて、省線の巣鴨駅に咲いていた萩の花枝である。省線の電車が、颶さつと風をきつて通過したとき、あたりで堤に咲きつらなかつていった萩の花房が瞬間大ゆれに揺れて乱れた。病的になつていたひろ子の神経は、その萩の花の大きいゆれをわが魂の大ゆれのようにはつと感じた。自分の哭なこうとする心がそこにあらわされたように感じた。

そういう夜と昼、ひろ子が臥ねて、起き出たのが、あの寝台であった。寝台をみると、乾きあがつて、心のやり場もなかつた四一年の夏がそこにまざまざと泛うかび上るのであつた。

寝台を買ったのは三五年の初夏であつた。或る早朝、ひろ子がたつた一人そのベッドに寝ていた二階の屏風越しに、ソフト帽の頭がのぞいた。それは、ひろ子をつれてゆくために、風呂場の戸をこじあけて侵入した特高の男であつた。

風知草の鉢は、ひろ子が友人にゆずつて出たその家の物干で、すつかり乾からび、やが

て棄てられたのだが、ひろ子の記憶に刻みつけられているもう一つの風知草があった。その風知草は、小ぢんまりした鉢植で、巣鴨の拘置所の女区第十房の窓の前におかれていた。出来るかぎりぴつたりと窓に近づけて置いてあるのに、風知草の細い葉のさきさえも戦がなかつた。いつみても、どんなに待つっていても、夜中でさえもその風知草の葉が動くといふことはなかつた。夏は、六十八年ぶりという暑熱で、温室のように傾斜したガラス屋根の建物を蒸し、焙りこげつかせていたのに。――

ひろ子は思い出にせき上げた。総て、すべてのこういうことを、どうして重吉に話しきれるだろう。重吉が帰つて、こうして、ひろ子の息づきはゆるやかになり、自分を崩すまいとする緊張から解放されて、はじめて、自分のこれまでの辛さや、それに耐えている女がはために与えるこわらしさを見ることが出来た。ひろ子をよく知つていて、つき合いの間には入りくんだいきさつもあつた或る作家が、短篇の中に氣質のちがう姉妹を扱つていたことがあつた。情感に生きる妹娘が所謂身もちもいい、しつかりものの姉について「そりや姉さんは親類じゅうの褒めものなんだから」という意味を云うくだりがあつた。

第三者にはまるで、ひろ子にかかわりない一つの物語としてあらわされた会話であつたが、ひろ子は、その作者がその作者のもちまえの声で、ひろ子に向つて其を云つてゐる響を感じ

じたことがあつた。そのとき、ひろ子は、その本を手にもつて、永い間、その数行の文字を見つめていた。そのときひろ子の胸に湧いた云いつくせない感情は、口で話せるものだらうか。

ひろ子は立ちあがつて、書いている重吉の肩へ手をやつた。

「——どうした」

「小説をかかして」

ひろ子は重吉のあいている方の手をとつた。

「ね、小説がかけるように勧かして。——お願ひだから……」

亢奮こうふんしているひろ子の顔つきを見て、重吉はおかしみをこめた好意の笑顔になつた。

「鎮まれ、しずまれ」

ペンをもつてている指先で、ひろ子のおでこをまじないのようぐりぐりした。

「それを云つてはいるのは、俺の方だよ。かんちがえをしないでくれ」

その時分、そろそろ新しい文学の団体も出来かかりはじめていた。十数年前にも一緒に仕事をしていたような評論家、詩人、作家などが、また集つて、口かせのはずされた日本の心の声をあげようとしているのであつた。

五

ひろ子は、行手の道の上にゆるやかな角度で視線をおとしながら歩いていた。おろしていくらもたたないのに、粗末な下駄は前がわれて、あぶなつかしかつた。低い丘の起伏の間をぬつているその道は、土ほこりが深くてぼくぼくのなかにごろた石がどつさりころがつてゐる。左手は、色づきはじめた灌木におおわれた浅い谷間になつていた。

ひろ子の歩きつきに、何となしあとなしいような懇ろなような様子があるのは、下駄がわれかかつてゐるからばかりではなかつた。歩いているその道が、よその道路を通る事務的なところもちとはちがつた氣持をひろ子にもたせていた。その氣持は、ずっと昔、小石川のある道をあるくとき、ひろ子の氣分に湧いたものと何処やら似ていた。その道に重吉が住んでいた。ひた向きにその一点しか目ざしていないのに、外からはどこへゆくか一応分らないようにして歩いている。おもしろいその氣持に似たところがあり、しかも、この道の上では、おのずとべつのにはにかみもあつた。その秋、自立会への道と云えば、普通の田舎道ではなかつた。自立会を十月十日に解放された共産党員たちの住んでいるところと

知つてゐるほどの人々は、そこへゆく道、その道を行き交う人の通りに特別な思いをはらつた。配給所へゆくのと同じ心でそこを通る人はなかつた。よかれあしかれ、自分の生活と関係のある新しい動力の発源地をそこに感じ、そこの様子を知ろうとして、淋しいガード下から曲つて丘をめぐるその一本道へ出た。そこを歩くひろ子は、あんまり行く先がはつきりしているのと、いそいそしている自分があらわなのとを、はにかんでいるのであつた。

行手の木立の間に、それらしい新しい建物が見えるところへ來た。すると、左手の草むらのうしろから、

「ひろ子さん」

大きい声で呼ぶ女の声がした。ひろ子は、道の上に立ちどまつて見まわした。

「ここです、お待ちしていたの、御弁当をたべながら——」

あわてて立つ拍子にとりまとめた紙包を、まだ胸の前にたくしこみながら、小さい男の子をつれた瀬川牧子が、高い草の間から歩いて出て來た。

「まあ。——どうして？　まち伏せ？」

牧子は数年このかた埼玉の町に住んでいて、滅多に会うことも出来なかつた。

「思いがけないところから現れたのねえ」

「よかつたわ、うまくつかまえられて」

上機嫌で牧子は男の児に、

「純ちゃん、これがおまくのおばちゃんよ、覚えている?」

と云つた。三つぐらいの純吉が遊びに来たとき、ひろ子はその子と小さい枕をぶつけ合つて遊んだ。それが大変気に入つて、おまくのおばちゃんという名をもらつたのであつた。
 「きょう、こちらへいらつしやるとお友達から又聞きいたしましてね。お家までとてもゆけないし、こつちなら電車が国分寺まで来るから、思い切つて出て來たの、よかつたわ、お会い出来て」

ほかに通る人のない道を、二人の女は五つの児の足幅にそつて歩いて行つた。

「元気らしいわね——」

ひろ子は、牧子にはその意味のわかる笑いかたで、
 「牧子さんだつて、もう元氣だわ。ねえ」
 と云つた。

その初夏、空襲の間に会つたとき、牧子はやつれて不安な眼つきをしていた。埼玉でも

その町は安全と云えず、食糧の事情もむづかしかつた。牧子の不安は、そういう日常だのに、そこの会社づとめをしている瀬川泰二が、戦争も最後の段階にさしかかつていると云つて、しきりに何か考え、牧子の知らない時間をよそで過して夜更けて帰るようになつて來た。牧子は、

「もし又あんなことになつたら、私たちの生活は今度こそどうなるのかしらと思つて……」

野良日にやけて、雀斑そばかすが見えるようになつた顔を沈痛にふせた。

「瀬川はそれでいいかもしけないけれども——」

瀬川夫婦の友人に玉井志朗という男があつた。大学が同期で、学内運動の先頭に立つていた秀才であり、万事目に立つ男だつたのが、つかまつた。これ迄、何年間ものがれていたのが不思議であつた。つかまつて、拘置所に入れられて、少くとも五年か七年帰れまいと本人さえ云つていたのに、急に出た。その男の伯父が、前法相であつた。入れかわりに、玉井のぐるりの友人は、一人のこさず被害をうけた。その前、一年半の実刑までを受けて出て來た瀬川は、ただ工場へつとめて、やつとヤスリを使い覚えたというばかりだのに、つかまえられたばかりか予防拘禁所に三年も置かれた。大した理由はなくてお気の毒だ、と云いながら、三年置いた。牧子は瀬川の母、その姉、良人とまるで立場のちがう妹夫婦

という錯雜した家族の間で、子供を育てながら精一杯の努力でやりくりして、瀬川の出で来るのを待つた。瀬川は、前の冬にかえつて、埼玉のそこへ勤めはじめていたのであつた。

そのときも、ひろ子と牧子とは焼跡の通りを並んで歩きながら話していた。

「あなたの苦勞は見ているから、いい加減が云えないわ。——でもね、牧子さん、どう？
あのいい眼つきをした若い瀬川さんが、俺はもう女房孝行だけして子を育てることにきめたよと云つて、段々張がなくなつて、じじむさい男になつて行くのをうれしがつて見ていらされること？」

牧子は、

「——そうねえ」

心から吐息といきをついた。瀬川の生きかたを理解し、瀬川の性格の美しさがわかついていても、くりかえし、くりかえし執拗に生活を破壊されることに牧子は殆ど耐えがたくなつて來ていたのであつた。

「年末になると、わたし段々おなかが重くなるし、そうすると又暫くお会い出来ないから、きょうこそと思つて……」

牧子は、いかにも心の祝いをあらわすように、

「これをおばちゃんに上げましょうね」

袋のよこにさし出ていた白い小菊の花束をくれた。

「いいにおい。——うれしいわ、丁度石田がねているから」

「病気がおわるいの?」

「足なのよ。痛くて歩けなくなつたの。たださえくたびれるのに、よく方角を間違えて、途方もなく歩いたりするんですもの」

道が二股にわかれて、一方の草堤に自立会と明瞭に書いて矢じるしをつけた立札が立っていた。ひろ子たちの前の方を、背広の男が一人ゆっくり歩いていた。遠くからその立札に目をつけているのが、うしろつきでわかつた。あの人も行くのかしら。そう思つて見ていると、その男は立札のところで歩調をゆるめ、自立会という三つの字を改めてとつくりたしかめるように見て、それなりに来た道をまつすぐ雑木林の方へおりて行つた。

太いタイアの跡が柔かい土にめりこんでついている。草道はそこから自立会の建物についてうねり、入口の前に通じた。

建物の横手に大型トラックが来ていて、手拭で頭をくるりと包んだジャムパー姿の若い人が三四人で、トラックの上から床じょうぎ几をおろしているところであつた。

床几は、粗末ではあるがどれも真新しく木の香がした。真新しいのは、その床几ばかりでなかつた。自立会という建物そのものが、出来たばかりというよりも半出来の真新しさで、広い畳から敷地を区切つてあるあらい竹垣のうちには、ついきのうまでこっぱが散らばり、おが屑が匂つていたような様子がある。思想犯として刑期を終つた出獄者を、そのあとまでもかためて住わせて思想善導をしようとして、本願寺が、この建物をこしらえた。国分寺の駅からよつほど奥へ入つた畠と丘の間の隔離された一郭として、これをこしらえた。十月十日、出獄した同志たちは、治安維持法撤廃によつて解体する予防拘禁所から、すぐ生活に必要な寝具、日用品、食糧、家具などをトラックにつみこんで、ここへ引越して來た。

重吉が網走からもつてかえつて來た人絹の古い風呂敷包みの中には、日の丸のついた石鹼バコ、ライオンはみがきの紙袋、よれよれになつた鉄道地図、そして、一まとめに大事にくくつた書類が入つていた。その束の中に、一通の電報があつた。データラスグカエレイエノヨウイモアル。同志二人の連名である。丁寧にたたんで使いのこりの封緘の間にはさまれているその電報を見たとき、ひろ子は、それを監獄で読んだときの重吉の思いを、そのまま、わが胸に感じた。網走へ。宮城へ。この電報はうたれた。その「イエ」は、こ

の自立会のことであつた。

壁が乾きたての小アパートという風なその二階建の建物は、ひろい農地のまんなかにポンとたつて秋日和に照らされている。門と玄関口との間が広場で、その一方に足場をほぐした丸太や板がつみ重ねてあつた。それによりかかつたりして、十五六人の女のひとたちがかたまつていた。まちまちの服装で、だれもかれも大きい袋持参で子供づれのひとも多い。子供たちは母のまわりをはなれないようにしながら、その辺で遊んでおり、赤ちゃんを洋装の上におんぶした若い母が、集つて何か笑つている。一年生の遠足でもあるのをそこで待ちあわせている姉や母たちというその場の空気である。牧子は、

「大分お集りだこと……」

小声になつて、自分と子供はひろ子からはなれるようになつた。

「わたしは、ただあなたにお目にかかりたくて來たんですから、皆さんとは別なんです。

——お待ちしておりますわ

「何にも大してむずかしい集りじやないらしいことよ。かまわないじやないの、いらっしゃいよ」

ひろ子は、きょうの女のひと達の集りは、これから何か仕事をしてゆく人々の顔あわせ

の ような 意味の ものとして、重吉から 伝えられていた。

「――石田さんで しよう？」

赤ちゃんおぶつて いる若いひとと 話して いた一人が ひろ子によつて 来た。

「もう 眼は よく おなりになつたんですか」

ひろ子が 熱射病で 一時 視力を 失つて いたことを 知つて いて、きいてくれる人 が あり、又逆に ひろ子の方 から、

「まあ、 来て いたの」

と、足早によつて ゆく若い人々も あつた。

服装が ばらばら などおり、めいめいの 生活も めいめいの 小道の 上に 嘗まれて 来て いるのだけれども、きょうは、その めいめいが、どこかで つかまつていて 離さなかつた 一本の 綱を、公然と 手繰りあつて ここに 顔を 合わせた、そういう、一種の つましさと 心はずみの混つた 雰囲気が 材木置場の まわり、婦人たちの 間に ただよつて いた。何かのはじまりとう期待と、同時に 見当のつかなさも その顔々に あつて、それは、玄関口の 敷居や 階段につけられた 土足の あとの 一つ一つが まだ 目新しい 自立会の 生活全体の 新しさと、全く 調和している。

日向をさけて、建物のひさしの下によつて佇みながら、ひろ子は、この女のひとたちの集つている光景を美しいと思つて眺めた。そこにはいろんな顔をした子供たちがいる。その母たち一つ一つの顔には生きて来た経歴が表情となつて刻み出でおり、しかも、このひとときの共通な信頼にくつろぎ、秋の日向にかたまつてゐる。目に見えない旗日があつた。ひろ子は、この広場の上を、いまおだやかにことなく過ぎてゆく時の流れの深みを、感動なしに感じることが出来なかつた。

「どうしたんでしょう……もうそろそろ二時ですよ」

腕時計を見た一人がつぶやいた。集りは一時から開かれる予定であつた。

「きいて来ましようか」

建物の中へその人が入つて行つた。そして鬚を生やした小柄な男と一緒に現れた。その鬚をつけたひとは、ちよつと片手を腰に当てる恰好で、

「徳田さんは今地方から來た人と会議中ですから、それがすんだらすぐはじめます。すみませんがもう少し待つて下さい」

もう一遍、

「会議がすめば、つづいてすぐやりますから」

とくりかえした。よく響く声のたちで、眼や額の皮膚は清げなそのひとが、どういうわけか小柄な体にすこしあかつぽい大鬚をつけて、年のわからないような威風あたりを払つている様子にはユーモアがあつた。拘置所では世間並に髪を生やしておくのにさえ蓄髪願といふ書類を出さなければならなかつた。こんな大きい鬚をもつてゐるため、この同志はどんな書類を書き、人間は自分の鬚については、それをのばしても刈つても自由な権利をもつてゐるのだということについて、がんばつて来たのだろう。人権に関する最初の戦利品というようなその鬚を見て、ひろ子は微笑をおさえることが出来なかつた。

「鬚の同志がきようの世話役らしく、暫くすると階段の下から、

「みんな、集つて下さい」

また響きのいい声で呼んだ。牧子と子供どが、どうしようかしら、という風にひろ子のわきに立つて躊躇しているのに目をとめた。

「あなたも来て下さい。遠慮なんかいりやしない」

一同は二階の一室の三方へ詰つて坐つた。建物のはずれの室で一方に大きい窓が開いた床の間つきの六畳であつた。二三人の男のひとたちが、床の間のかまちに腰かけて、三尺の入口のふみこみのところだけ、すこしすきがのこされた。

「あ、ようござんす。それはまたそれで、あとからやりますから……」

「ござんす、というところがいく分鼻にかかる訛りを響かせながら、坐っているみんなに挨拶するようにして徳田球一が入つて來た。一方の窓を背にして置かれていた小机の前に坐つた。

「どうも今日はお忙しいところをすみませんでした」

女のひとたちは、そろつて行儀よくお辞儀をした。又そろつて頭をあげて、黙つたまま眼にちからを入れた表情で、カーキ色の国防服めいたものを着ている、はげ上つた、精悍な風貌を見つめた。

「わたしは、外国へやられたり、牢屋へ入つたりばかりしていて、これまでに結婚生活をしたのは、たつた七ヶ月ぐらいのもんでした。だから、御婦人の生活をよく知つているとは云えないかもしけないが、見ていると、実に日本の婦人の生活は過労です。氣の毒にたえないほど疲れはてた状態だと思うんだが、どうですか」

赤ちゃんを背中から膝の上にだきとり、さもなければ牧子のように一人わきに坐らせて、もう一人はおなかの中で今育ててているというようなひとも幾人か加つてゐる一同は、全く云われるとおりという面持で應えた。

「日本の男は婦人たちをもつと、しんから可愛がらなくちやいかんと思うんです。婦人の生活が、もつと合理的になるように、過労しないですむように、大いに努力して、改善して行かなくちやならない」

そして、日本の社会の歴史の中で婦人がおかれて来た事情と、民主主義というものの、三つの段階と、それぞれの段階での婦人の立場が説明された。

婦人ばかりがぎつしりつまつた狭い室だが、開けはなされた二つの大窓から流通する光線と大気とは、すがすがしくて、秋の午後の清潔なぬくもりが室じゅうにとけている。窓からは遠く森や丘のつらなつた外景と、その上の空が見えていて、風景は骨組の大きい一個人物の肖像のバツクをなした。深くはげ上ったかたい前頭。熱中して性急に話すにつれて、その主張をききての心の中へ刺しこもうとするように動き出す右の手と人さし指の独特な表情。引きしまって、ぼやついたところのない音声と、南方風なきれの大きい眦。^{まなじり}話につれて閃く白眼。その顔のすべての曲線が勁く、緊張していた。博い引例や、自在な諷刺で雄弁であり、折々非常に無邪気に破顔すると大きい口元はまきあがり、鼻柱もキューと弓なりに張っている。ひろ子は自分が美術家であつたら、この、独特な、がつちりと動的に出来上つた人物をどういう手法であらわすだらうと思つた。一番ふさわしいのは、永年か

かつて、漆で塗りかためた乾漆であると思えた。顔全体が赧みがかつた茶色で、眦を黒々と、白眼を冴えて鼻は大きく、そこにどんな雨がふりそそごうと、その雨は粒々になつて鼻のさきや頸、額からころがりおちてしまつて、ちつともしんはぬれもくさりもしない乾漆のつよさ。同時に、そとからの様々な意志に向つても屡々それをはじき返すだらうような一徹さ。それはだぶついていつも曖昧さを漂わせている日本の名士づらに鋭く対照する面構えである。

この指導者が、縦横無尽という風に、ときには悪態さえ交えながら、しかも、婦人たちの本能的なつしみには自然のいたわりをもつていて、荒っぽく、しかも淡白な話ぶりをもつていることに、注意をひかれた。この人の悪口は、火の中から出したばかりの鉄かなごてのようだ。あつくて、ジリツとし、やけどをさせ、また消毒力ももつてゐる。その味は、雨の滴もころがり落ちてしみこめない漆ぬりの風貌全体と、一致していた。

この人物をとり囲んで坐つてゐる婦人たちは、何とほんやりと軟かく、婦人たち、とう一般性の中に自分たちの肉体と個性とをとかしこんでゐるだらう。それにも、一つ一つの顔は、人生の一つ一つを物語つており、婦人の様々な必要、希望、苦痛そのものの生きた姿として、そこにつめかけ坐つてゐる。

「坊や、いい子でしょう、おとなに、お話しいてましょうね」

もじつく子供にそう云つて、その小さい肩へ片手をかけて、母たちは熱心に傾聴している。自分で自分を解決してゆこうと欲している。そういう熱意があふれ感じられた。

ひろ子は、さつき建物のそとで待つてゐるときにうけたと同じような感動を、一座の光景から感じた。婦人の集会でこれまでただ一度もこんなに公然と、しかも新しい社会の建設にともなう婦人の将来を話し合う場所はなかつた。

説明が終つてから、婦人の側からの発言が求められた。一座をみわたせば、そこに坐っているほどの女のひとたちは、みんな十分会合に馴れていると思えた。落付きのいい坐り工合が、それを語つていた。しかし、自分から発言する人はいなかつた。そこに、すべての婦人が苦しく、ちりぢりばらばらにさせられて凌いで來た十数年の月日がてりかえされた。中国地方から來ていた一人のひとが、その地方の婦人の事情を報告した。ひろ子が名づされて、一九三二年から以後の婦人の生活や文化の状況を短くまとめて話した。居合わせている婦人たちは、ひろ子が知つてゐるよりもっと細部についてわかっている。けれども、十八年、監獄におかれた人は、それについて知つていて知つていないだろう。ひろ子は、そのことをことわつて簡単に話した。

段々座がくつろいで、いくつもの声が物を云いはじめた。二十歳をすこし出たばかりぐらいいのふつくりとして愛らしい人と、速記をやつてもう仕事をたすけている二十四五のひととが、臨時の書記にきめられた。数人のひとが、又この次日をきめて集るということになつた。婦人に関する綱領がつくられる仕事があつた。

「長井さん、あなたが引こんでいるつてことはないわ、出なさいよ」

「ええ。——そもそも思うんだけれどもね、……」

かたまつて話し合いながら階段をおりてゆく婦人たちは、主に、十月十日にかえつた良人と一緒に、ここに住んでいる人たちであつた。

会合がすむとすぐ下の炊事場で、これらの人たちが分担している活動がはじまつた。台の下やその他の隅々はまだ真新しいコンクリート床で、みんながきまつて盛に往来するところだけ泥あとのついた炊事場で、ポンプをくみ上げる音、薪をわる音がおこつた。

夕闇の濃くなつたそとへ出ようとする玄関口の受付に、電燈がともつていた。そこにかたまつている若い人々の群の中から、つとはなれて、ひろ子の前に来て立つた人があつた。その顔は笑つている。瞬間、とまどつたひろ子は、目を据えてみて、

「まあ、ようこそ！」

覚えず片手をさし出した。太平洋戦争がはじまる前まで、新交響楽団の定期演奏会は前売切符を会員に送った。その時分にひろ子もよくききにゆき、山沼というその青年も、大抵とききに来ていた。音楽をきいた帰りに、お茶をのみに歩いたりしても、山沼は、或る種の若い人のするような話しぶりをせず、いつも落付いた科学者であつた。山沼に会つたのは古くて、ひろ子の友達の長男と同級のよしみで、落ちあつたのが縁であつた。こういう青年も、今はこの場所に来ている。しかも、受付にかたまつて、若い人々の中にいたときの空氣でみれば、山沼はおそらく、ひろ子などよりはるかにここに近く暮しはじめている様子だつた。

「何年ぶりでしよう。——お元気でいいわね」

「石田さん、体どうですか」

山沼は、やはり、もとの通りやさしく、しかし必要なことしか云わなかつた。

「じゃあ、また」

「お元気で。よろしく」

ひろ子は、待つていた牧子と一緒になつた。純吉は、暗いし眠いし歩けなくなつて、牧子におんぶされている。

「失礼ですが、よく御存じですか？」

しめりはじめた草むらが匂う道を歩きながら牧子がきいた。

「よくつて云えるかどうかしらないけれど——なあぜ？」

「たしか、瀬川の御友達のかただつたと思うんですけれど……わたしは御存じないんです」
きょうが目には見えない女と子供のひとつすじの旗日であつたように、誰の目にも見えないカドリールの輪がある。そうひろ子は思った。古風なカドリールの音楽につれて、手から手へ繋がりあつて、送られて、まわつて、又新しい手につながれて動いてゆく、見えない仲間のカドリールがあるという陽気な気がした。

「ここは、まるでノアの箱舟ね」

ひろ子が、笑つて云つた。

「何でも一応あるのね、あんなに大きい髪まであつたわ。気がついたでしよう？」

「ほんと」

眠つて軟くまるまる純吉をゆりあげながら牧子も笑つた。そして、二人は明るいとき通つたほこりの深いゴロタ石の道を駅に向つた。先へゆく一団の中に懐中電燈をもつている人があつて、その蒼い光の条が、ときどき前方の木立の幹や草堤の一部をパツと照らし出

した。

六

重吉の左脚の筋炎は、一週間ほどして段々納まりはじめた。日当りのいい八畳に臥てゐる重吉の湿布をとりかえながら、

「こんどの足いたは、可哀想だつたけれど、わるいばかりでもなかつたわねえ」

ひろ子が、云つた。

「こんなにして、昼間、しづかに臥ていらつしやると、 shinから休まるでしよう?」「たしかに、そういうところはあるね」

「世話するものがついていて、すこし工合をわるくして臥てているというようなきもちなんか、あなたとしてこんどがはじめてなのねえ」

そういうことのほかに、幾日も外出しないで重吉がうちにいるということは、ひろ子にとつていろいろの意味をもたらした。

自立会へ行つた翌々日、卓の上に飾つていた牧子からの白い小菊の水をとりかえている

と、臥てゐる重吉が、彼の公判に關係のある古い書類を出すように云つた。

「在るんだろう？」

「それはとつてあるわ」

そう云いながら、余りしまいこんでいて、その紙ばさみがなかなか見つからなかつた。ベッドのしまつてある奥の小部屋で、いくつもの包みの紐をといて見てゐるうちに、必要な書類が出るより先に、一つの大型ハトロン封筒が出た。裏に、文学報国会と紫のゴム印が捺されてある。封筒の中にはひろ子の小説をうつした原稿が入つっていた。

見つかつた書類と一緒に、ひろ子はその封筒をもち出した。そして、重吉の仕事が一段落ついたとき、

「こういうものが出たわ」

その封筒を見せた。

裏をかえしてみて、重吉は、

「文学報国会とあるじやないか、何だい」

と云つた。

「なかを見てよ」

「その日の雪」という題と名だけはひろ子の自筆でかかれている三十枚ほどの小説を、重吉は怪訝そうに、ところどころよんだ。

「誰かに写させたのかい？」

「文学報国会で、戦争中、作品集を出す計画があつたんです。そのとき、わたしも会員だつたから、作品一篇自選しておくれと云つて来たの。それを送つたら、都合によつてお返しするとかえして來たのよ」

「ひろ子が自分から送つたのか」

「ええ」

「わざわざ写させてか？」

「そうなの」

重吉は、口元に一種の表情をうかべて、少し念入りにその原稿を見直した。

「婦人雑誌に、何だか中途半端な小説をいくつか書いていたときがあつた、あの一つだね」「そうなの」

原稿を床のそとの畳へ放り出すように置いた。

「ほかの人達もみんな出したのか」

「そうでしようと思うわ」

「そして、その本は出たのかね」

「どうなかしら——わたしは見たことないけれど……」

重吉はしばらく黙つて、ひろ子の顔をまじまじと見つめた。ひろ子も、その重吉の二つの眼が、ふだんとちがつて濃い睫毛に黒くふちとられた四角い二つのまなことなつて自分の上にあるのを見ていた。

「ひろ子、覚えているかい？　俺が、文学報国会なんてものは脱退しろ、とあんなに云つたとき、何でがんばつたか。——あなたには外の様子が分らないからつて、がんばつたんだぜ」

そのときのいやさが忘られないように、重吉はひろ子の口真似をして云つた。

「そうなのよ。だから、わたし、この封筒もお目にかける気になつたの」

「わからないことがあるもんか——ちゃんとわかっていたじやないか。——会費を送るのはやめたかい？」

「やめたわ。それは大抵の人がやめたでしよう」

もと文芸家協会として組織されていたものが、団体ぐるみ文学報国会というものになつ

て、会員の一人だったひろ子も自然そこにひつくるめられていた。

またしばらく黙っていたのち、重吉がいかにも笑止千万という顔つきで、

「この小説、もしもさきでことわって来なかつたら、ひろ子はのせていいと思つたのかい」「のせたい、と思つたのじやあないのよ。のせた方がいいだろう、そう思つたのね。あの時分……」

そのことが話したくて、ひろ子は、その封筒も重吉の前に持ち出したのであつた。戦争が進み、情報局がすべての文化統制を行つて、文学者やその作品をすつかり軍用に統一しあげ始めた頃、ひろ子たち一群の作家は、不安な状況に陥つた。一九四一年の一月から、ひろ子ははつきり作品発表を禁止されて、それからは却つて、立場も心もちもきつちり定つた。生活万端いかにも苦しいけれども、自分は自分なり、と落付くところがあつた。それまでの一年間ばかりはすべてが不安定で、ひろ子は、自分だけが、例えれば文学報国会を脱退することで、一層くつきりと目立つて孤立することがこわかつた。防空壕にたつた一人で入つているより多勢といたいこころもちがあつた。文学の分野でも、情報局の形をとつた軍部の兇悪な襲撃を、たつた一人で、我ここに在りという風に、受けとめる豪氣がひろ子にはなかつた。みんなのいるところに出来るだけ自分も近くいたいという人恋しさがあ

つた。けれども、重吉が、笑止千万という表情でひろ子を見るとおり、ひろ子のそんなところものは、書くものを御用に立てない以上、役人にとっても笑止千万なことであつたらう。その頃文学報国会の役人は、もう文学者ではなくて、役人どころか情報局の軍人が入つて来ていた。

「あのころ、ひろ子が、つべこべ云うのが、不思議でたまらなかつた。実にはつきりしているんだもの。どうして、自分の亭主の頸に繩をかけているものを一緒んなつてひつぱるようなことをするんだろうかと思つた」

「私もそう思うわ。だから、あなたは、よくああいう風におだやかに云つていらつしやれたとびつくりするの」

面会のとき、文学報国会を脱退するしないの話が出た時、重吉は、おだやかにそのことを云い、ただ、おどろくばかりの根氣づよさで、それをくりかえした。きょうも。あしたも。又その次に会つたときも。ひろ子が、遂に云いわけや口実をこねくりまわす余地がなくなる迄くりかえした。

「わたしが、本当にすつきりしたのは、あなたの公判をずうつと一緒にやつて行つて、それが終つたときだつと 思います。——手紙にも書いたわねえ」

「うん」

「前から、いつも云つていたでしよう？ 自分という船の自分のコースがしつかり出来たら、どんなにいい気持でしようつて。岸沿いに、岸の灯にひきよせられたり、そうかと思うと濤なみに押しのけられたりしていないで、水の深い沖を自分のコースに従つて堂々進行する船になりたいつて。——あなたの公判がすんで、江波土に行つたことがあつたでしよう。あのとき、はつきりわかつたのよ、自分がいつの間にかもう沖へ出たことが。自分のコースというものはもう辿られていたことが分つたの。……だから、わかるでしよう？ 私がどんなにあなたの力りきそう漕漕をありがたく思つたか」

ひろ子の妹が、疎開して、夷隅川のそばの障子も畳もない小屋に菰こもだ垂れの姫というような暮しをしていた。ひろ子はそこで、潮の香をかぎ、鯨油ランプの光にてらされる夜、濤の音をきき、豆の花と松の若芽の伸びを見ながら、井戸ばたでよごれた皿などを洗つて数日くらした。その数日は、それまでの数年間のくらしの精髄が若松のかおりをこめた丸い露の玉に凝つて、ひろ子の心情に滴したたりおちるような日々であつた。

「——チエホフが、おくさんのクニツペルにやつた手紙およみになつた？」

ひろ子は、封筒の中へ、原稿をしまいながら、重吉にきいた。

「今おぼえていないな」

「チエホフは、しやんとした人だつたのねえ、クニッペルに、芸術家としてお前自身の線を出せ、自分の線を発見しろ、とくりかえし云つてているのよ。——でも、私はつくづく思つたわ。クニッペルにはおそらく特色とか個性とかいう位にしかうけとられなかつたでしょ。——ある芸術家の線なんて、全く歴史的だわ、ねえ。線としてまとまる要素なんかほんとに複雑だわ。しかし、まとまるためには微妙きわまる媒介体がいるのよ。それは、理窟じやないわ、ただの理窟じやないわ。実に人間らしい情理が一つになつたものだわ——そうでしよう?」

重吉の床のわきで羽織のほころびをつくろいながら、ひろ子はそんなことを熱心に話した。もう重吉は、つぎは俺がしてやると云わず、よみかけの書物を枕のわきに伏せながら、仰向きにねていた。

れよつて来ていた力が、渦になつて、そろそろと仕事の中心を、市内へ押し移しはじめた。

ある朝、出がけに、重吉はひろ子に一枚の紙きれをわたした。

「こんど事務所がそこになるんだよ、きょう、昼ごろ、弁当とどけて貰えるだらうか」

「この新しい方へ？」

「ああ」

「いいわ」

紙きれには鉛筆であつさり地図がかかれていた。元電気熔接学校というところが赤旗編へ
んしゅうきよく 輯局と示されている。

「この地図頂いておいていいの？ あなたは大丈夫？」

「大丈夫だ。代々木の駅からすぐだよ、二本目の道を来ると、左側だ」

時間をはからつて、ひろ子は弁当包みをもつて代々木駅に降りた。ごくたまに乗換のとき、しかもひろ子の記憶では、のりまちがえて間誤付きながら乗りかえるようなとき、二三度のぼりおりしただけの代々木駅の前に立つて、地図のいう二本めの道をさがしたが、はつきり見当がつかなかつた。やや暫く立つていて、ひろ子にはそれが二本めと思えたアスファルトのひろい道を左へ歩き出した。じきだというのに、左側にそれらしい建物もな

くて、人家らしいものはなくなり、ガードと、神宮外苑の一部が見えはじめた。ひろ子は、心細くなつてリアカーを曳いた男と立ち話をしていたエプロン姿のお神さんに、電気熔接学校と云つて訊いてみた。そこのガードをくぐつて左へ出ると、ロータリーと交番があつて、そこを又左へとおそわつた。その辺はすつかりやけ原で、左手にいくらか焼けのこつた町筋がある。そちらへ辿つてゆくと、右手にコンクリートの小ぶりな二階建が見えはじめた。重吉は左側だと云つた。だのに、右側にあるのがそれらしい。半信半疑に近よつたら、長方形の紙に、赤旗編輯局とはり出されて、両開きのガラス戸の入口がしまつていた。

赤旗編輯局。——ひろ子は、その字がよめる距離から入口のドアをあけるまで、くりかえしくりかえし、その五字を心に反覆した。これまで、日本ではただの一通も通行人に読まれたことのなかつた表札であつた。赤旗という新聞を知つているものも、その編輯局と印刷局が、どういうところにあるのかは知つていなかつた。人々が十数年前、どこか市内の土蔵の地下室にその印刷所があつたことを知つたときは、スペイによつてその場所があばかり、当時活動していた重吉たちすべてに、事実とちがう誹謗の告発がされた時であつた。ひろ子の文学上の友人で、その頃、印刷所関係の仕事をしていた詩人があつた。ひとは、十一年後の十月十日に解放された。重吉たちはもとより、とりわけその友達が、

こうして大きく貼り出されている表札をよんだとき、涙は彼のさりげない笑いの裡にきらめいただろうと、思いやつた。一枚の赤旗のために、それをもつて女がつかまれば、陰毛をやかれるような拷問を受けた。それを知つていて、女は、やはり赤旗をもつて歩きもしたのであつた。

ひろ子は、これまで開けたことのなかつた大きな箱のふたでもとるように、丁寧にそつと入口のガラス戸を押して入つた。入つたばかりの右手に受付のようなところがあつて、つき当りは、薄暗いガランとした広土間であつた。土間には太い柱がたつてゐる。

ひろ子は、その辺に誰もいないので、コトリ、コトリ下駄の音をさせながら、左手の階段を二階へのぼつて行つた。元は活動小屋だつたのを、学校に直したというその建物は荒れていた。二階の壁の上塗りははげ落ち、きずだらけで随分きたなかつた。妙な建てかたで、数の少い外窓の内側が窮屈な廊下になつていて、その中に広間があつた。階段口の右手に、狭い小室が一つある。

ひろ子は、荒れてきたない廊下のところに立つて、重吉はどこにいるかしら、と思つた。建物じゅうにまだ人はごく少ししかいならしかつた。永い間人気なく、しめこまれていた埃と湿氣のにおう広間の一隅で、その日の午後から開かれる解放運動犠牲者追悼会のた

めに、演壇に下げる下げビラを書いている人たちが四五人働いているかぎりだつた。重吉はそこには見当らなかつた。すると、階下から二人づれの若い男が、足音を揃えるように登つて来て、ひろ子を一寸見て、わきを通りぬけ、右手つき当たりのドアの中へ入つた。そこには人がいるらしい。しかし、ひろ子は、どうしても、ずけずけ入つて行つて、内部を知らない室のドアをあける気がしなかつた。

ひろ子が小さかつたとき、建築家であつた父が、八重洲町の古い煉瓦のビルディングの中に事務所をもつていた。その事務所を、ひろ子はどんなに尊敬し、憧れ、好奇心を動かされたろう。ジリンと入口のベルを手前にひっぱつて鳴らすと、爺さんの小使いが出て來た。そして、父のデスクのわきに案内された。事務所は、どこもアラビア糊のような匂いがした。ひろ子は父にことわり、その許しが出ないと、半地下室で青写真が水槽に浮いている素晴らしいみものさえ、勝手に見にはゆかなかつた。

日本ではじめての日の目を見るようになつた赤旗編輯局のきたない壁も、古くさくてごたついた間どりも、埃くささも、ひろ子の心にとつては、昔父の事務所で感じたこころもちに似た思いを誘うのであつた。ひろ子は、感動のあふれた、子供っぽい顔をして、廊下に立つたままでいた。

廊下のつき当りが、どこかへ曲っているらしく、そつちから不意に重吉が出て来た。ひろ子は、思わずよって行つた。そして、

「きたなけれど——いいわ」

と云つた。重吉は笑つた。

「こっちへ来るといい」

つき当りのドアの中は、この建物全体と同じようにまだがらんとしていた。むき出しの床に、粗末な板テーブルと床几とが二列ほどに置かれていた。一方の床几に見知らない人が黒い外套の襟の上から、やせたポンノクボを見せてあちら向きにかけていた。つき当りの板テーブルに、重吉よりはおくれて宮城から出獄した仲間の一人がいた。公判廷でみたときよりももつとやせて、一層角のついた正八角形という顔の感じである。ひろ子は、その手を執つて挨拶した。さつきの男二人は、入れちがいに出てゆき、重吉が、

「弁当もつて來たかい」

ときいた。

「御一緒にたべたら？」

「僕はあるんです」

そのひとは、握り飯を出した。重吉とひろ子は弁当箱をあけ、鰯のやいたのを三人でわけて板テーブルの上で食事をはじめた。まだ湯をわかす設備もなかつた。

そして、食べているところへ、一人新聞記者が入つて來た。その記者は重吉とうち合わせてあつた用向きについて事務的に話してから、煙草に火をつけ、世間話をはじめた。

「この間うちから僕は徳田さんにも会つたし、志賀さんにも会えたんですが、袴田里見さんていうのは、一体どんな人ですか？　どうにも会えないので残念なんだが」

ひろ子は、ひどく面白がつた眼つきで重吉を見た。重吉はおかしそうに笑つていたが、一寸となりを見てから、

「すぐ近くにいますよ」

と云つた。

「え？　じやきよう会えますね」

「ここにいるのが、同志袴田です」

記者の真向いで鰯をかじつていたひとが、

「やあ」

と、笑い出した。

「どうも——これは……」

記者は、今更床几から立上るのも不自然で間誤付きながら、片脚をそろりと床几の下へかくすようにした。

「ほかの政党だと、幹部連のえばかりかたがちがうから、どこにいたつて入つてさえ行けば一目でわかるんですが、どうも共産党の人は……失礼しました」

名刺を出して、頭を下げた。

格別用談もなくてその記者が去り、やがて黒外套の見知らない人も出て行つた。二人きりになつたとき、重吉が、出ていたノートを書類鞄にしまいながら、

「ひろ子、来たついでに経歴書、出してゆくか」

と云つた。

「経歴書つて——」

突然な気がして、ひろ子は躊躇した。経歴書を出すということは、正式に組織上の手続きをするという意味であろう。

「それは、わたしとしては当然なことだけれど……」

ひろ子には、今、直ぐ、ここで、という用意がなかつた。二つの仕事が両側から一時に

迫つて感じられた。文学の仕事と、ひろ子が女であるということから自然おこつて来る婦人関係の仕事と。その頃、ひろ子には、あとの方の用事が多かつた。書くものも、所謂啓蒙風のものばかりの結果になつていた。

重吉は、いくらか促すように、

「——今、みんなの経歴をあつめているんだ」

と云つた。

「——仕事、どういう風になるのかしら。それが分らなくて」

ひろ子が短い啓蒙的なものをかくたびに、重吉は、仕事を整理しろ、と云つていた。そんなことで、いつ小説が書けるか、と云つていた。文化の各方面で、それぞれ本当の専門家が生れなければならぬことは痛感されていた。昔のプロレタリア文化運動とそれにしたがつた人々の仕事ぶりの推移をみれば、それはすべての人々に肯ける必要なのであつた。

小説はいつ書くのか、と、とがめるように云う時さえある重吉の考えは、経歴書とどういう角度で結び合わされているのだろう。拒絶する理由はどこにもなかつた。それはひろ子にとって、ひろ子が石田の妻であることに等しく自然な本質に立つてゐる。が……

「今すぐ書けなければ、あとでもいいんだ」

そこへ、又見知らない黒外套の人が戻つて來た。ひろ子は、十分話し合えず、すまない、いやな心持でその話はうち切つた。

八時すぎて夕飯が終つたとき、ひろ子から再びその話をとりあげた。

「きょう、もしかしたら、あれを書くようにと思つておびになつたの？」

「そういうわけでもなかつた。——どうせ来たんだからと思つただけさ」

ひろ子は、洗いものはあとまわしにして、昼間自分の心に湧いた躊躇について説明した。

「仕事のことが、その点ではつきりわかれば、わたしは勿論いやというわけはないんです」

「そんなことは、ひろ子自身の仕事ぶりで、何が一番適当したことか客観的に証明してゆけばいいんだ」

「そういう風にやつて行つていいなら、ほんとに、うれしいわ」

「だつてそれが当然だらう」

「そうだと思うわ。でもね、それが当然だと思われているときいたら、どんなにいろんな人がよろこぶかわからないと思つてよ——何となしに心配していると思うわ。場ちがいのことで、自分の専門が、分らないようになるんじやないかと心配している人が少くないん

だと思うんです……」

重吉は、自身が文学の仕事から政治の分野に移つて行つた時代の、非合法の激しい日々を深く思いかえす風だつた。

「もとの弾圧や苦労がひどすぎたから、今でもまだおじげづいているところもあるんだね」「その点だけを一方的に誇張して知つたかぶりをするのが見識だと思つてゐる妙な連中もあるし……治安維持法というものがなかつたみたいに云う人があるわ。それがどんなことをやつたから、ああなつたのか考へる必要もないみたいにいう人もあるわ」

しばらく黙つていて、重吉は、

「だが、いまの、一番ふさわしい仕事をしていい、ということは、作家なら作家としての日常に、歴史的な責任を求めるないということじやないんだよ」

ひろ子の理解を補おうとするようにつけ加えた。

「それは、わかるわ。求められるといふわけのことじやないんですもの、土台——自分が求めて、その門に到つた、ということなんだもの……」

「文化関係の人は概してこだわるね」

ひろ子の場合をこめて、更にひろ子の知らない、いくつかの例を、心のうちで調べるよ

うに重吉が云つた。

「——やつぱり生活や仕事のやりかたが個人的なせいかしれないね。……夫婦なんかの場合、ギャップはうめられなくなるからね」

最後のひとことを、ひろ子は瞳を大きくしてきいた。重吉がそれを云つたということではなく、一番しまいに、ひろ子が自分で自分のこころもちをきめたのち、はじめて重吉はそれを云つた。そのことが、ひろ子のきもに銘じたのであつた。

十二月はじめに、はじめての大会がもたれることになつた。赤旗編輯局という表札と同様に衆目の前でもたれる大会として、それは最初のことであつたが、歴史の中では第四回目に当つた。

いろいろの大衆的大集会も活気にみちてもたれていて、一九四五年の冬は、日本の民主主義の無邪気な発足の姿であつた。

木枯こがらしの吹く午後おそく、ひろ子は、前後左右ぎつしり職場の若い婦人たちで埋つた講堂で、ニュース映画を観ていた。それは「君たちは話すことが出来る」と云う題であつた。十月十日に、同志たちが解放される前後を中心として、治安維持法と、その非道な所業、

その法律の撤廃を描いた映画であった。山本宣治を殺して出来た治安維持法が、小林多喜二を虐殺し、渡辺政之輔その他たくさんの人々を犠牲とした。小林多喜二が命を失つたときの顔が大うつしにされたとき、ひろ子は総毛だつて涙をためた。ひろ子は、この顔を自分の眼で見た。小林のおかあさんは、この息子の顔の上に身をなげふせて、優しく優しくこめかみの傷を撫でながら、どんなに泣いたろう。あんちゃん、どげにきつかつたろうなあ、そう云つて撫でては泣いた。

その治安維持法によつて獄につながれている人々の、生活ぶりが、薄暗いのぞき穴をとおしてうつされた。やがて、この悪法は撤廃されることになつて、画面に一つの力づよい手が現れて、特高と書いた塗札をひきむしめた。検事局思想部の掛けも、もぎとつて床にすてられた。画面にふたたび、府中刑務所のいかめしい正門が見えて來た。遂にこの扉の開かれる日が来ました、という言葉とともに、しづかに、ひろく一杯に刑務所の大門が開いた。急にカメラの角度がかわつて、ひろ子たちの方へのしかかつて来るよう、その門の中からスクランムを組み、旗をかざし、解放された同志たちを先頭にした大部隊が進行して來た。真中に徳田、並んで志賀、その他ひろ子の顔も見分けられない幾人かの人たちが、笑い、挨拶の手を高くふりながらこちらに向つて進行して來た。隊伍の足なみは段々精力

的に高まつて来て、ある角では出獄した同志たちが、肩車ではこばれる姿が見えた。或るところでは、体をうしろに反らせた駆足となり、幾本もの旗は列をとりましてひらめき、わつしよ、わつしよという地鳴りのような声々とザツザツ、ザツザツと規則正しくふみしめる靴音は津波のように迫つて、やがてその蜒々えんえんたる列伍は、歴史的な時間の彼方に次第次第と遠のいて行つた。幾千人もの鼓動とともににはき出される、そのわつしよ、わつしよという力のこもつた声と、ザツザツ、ザツザツという地ひびきとは、ひろ子を泣かせて、涙を抑えかねた。まわりでもこのとき泣いている人がどつさりあつた。涙で頬をぬらしながら、なお、その身内をせき上げるような熱い轟きを迫つて画面に見入つてゐるひろ子の心の視野に、丁度その隊伍の消え去ろうとするかなたから、二重映しになつて一人の和服姿の男が、風呂敷包みを下げ、草履ばきでこちらに向つて歩いて來るのが見えるような気がした。こちらに向つて歩いて來る人物はぼつつりとたつた一人である。しかし、その透明な体の影をつらぬいて、なおわつしよ、わつしよという、ときの声が響いており、ザツザツ、ザツザツという地ひびきはどどろいている。透明な影のように画面から歩み出し、しかし、くつきりと着ている紺絣までも見える人物は、出獄したばかりのイガグリで、笑つていてそれは重吉であつた。重吉は一人で歩いている。「君たちは話すことが出来る」

と、今は工場の広庭でかたまつて話している人々の間を、重吉は歩いて来る。「君たちは話すことが出来る」円く集つて話している女のひとたちのよこを、重吉は歩いて来る。ひろ子は、見ている画面が益々幾重にもなつて、きのう見て来た代々木の事務所の入口に、かかげられていた横看板の字が、そこに浮んで来るようと思えた。すこしくずした太い字で、日本共産党とかかれている。それは、いかにも大きい板をこしらえだどこかの土木業の誰かが勢こんで筆をふるつたという風な文字で、肉太で、べろべろして、ちつとも立派ではなかつた。しかし、その大看板が車よせの庇の上で、うららかな冬日を満面にうけているところは、粗野だが真情のある大きな髭男がよろこび笑つているような印象を与えた。通りから見あげて、ひとりでに口元がくずれ、昔の女が笑いをころすときしたようにひろ子は、元禄袖のたもとで口をおさえた。その玄関の中では、きのう、もう多勢の人たちが働いていた。重吉たちのように、のびかかつたおもしろい髪で働いている人が少くなかつた。まるで短かつた重吉のイガグリは、ひろ子がさわると、ごく若い栗のいがのような弾力と柔かさで掌にこたえるように伸びて来ていた。そういう髪の人々が、いそがしそうにその建物を出たり入ったりしながら、第四回の、大会の準備をすすめていた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第六巻」新日本出版社

1979（昭和54）年1月20日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十巻」河出書房

1952（昭和27）年6月発行

初出：「文芸春秋」

1946（昭和21）年9～11月号

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年6月25日作成

2007年7月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られ

ました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

風知草

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>